

国際シンポジウム

Symposium on Regional Revitalization

地方創生に

地域と世界を結ぶ

求められるもの

2015年11月20日(金)

講演録



公益財団法人

日本生態系協会

国際シンポジウム

地方創生に求められるもの

地域と世界を結ぶ

平成27年11月20日(金)
イイノホールにて

主催 (公財)日本生態系協会

後援 内閣府 総務省 環境省 国土交通省 農林水産省
全国知事会 全国市長会 全国町村会
(公社)日本都市計画学会 (公社)土木学会 自治体学会
(公社)日本ナショナル・トラスト協会 日本ビオトープ管理士会

目 次

講演者プロフィール	4
開会挨拶 (公財)日本生態系協会 理事 八千草薫	6
来賓挨拶 環境省自然環境局長 奥主喜美氏	7
自由民主党地方創生実行統合本部 本部長 鳩山邦夫氏	8
国土交通省水管理・国土保全局長 金尾健司氏	10
趣旨説明 (公財)日本生態系協会 会長 池谷奉文	12
特別講演	
「順天湾と順天湾国家庭園 効率的な保全と持続可能な発展による創造経済効果」	16
韓国順天市 市長 趙忠勳氏	
ご挨拶 地方創生担当・内閣府特命担当大臣 石破茂氏	28
自治体からの報告	
「ツルが選んだまち ～出水市の取組～」 鹿児島県出水市 市長 渋谷俊彦氏	30
「周南のナベヅル ツルと「共に」生きる里の挑戦」	36
山口県周南市 市長 木村健一郎氏	
「離島佐渡の挑戦 ～歴史と文化が薫り 自然と人が共生できる美しい島～」	42
新潟県佐渡市 市長 甲斐元也氏	
「人と自然が共に生きる、大型水鳥類をシンボルとした地域づくり」	52
島根県出雲市 市長 長岡秀人氏	
「渡り鳥との共生を核とした持続可能な地域づくり」	62
宮城県大崎市 市長 伊藤康志氏	
「コウノトリと共に生きる ～豊岡の挑戦～」 兵庫県豊岡市 市長 中貝宗治氏	68
「コウノトリが運ぶ農業の未来 ～お接待文化が息づく徳島の取組み～」	74
徳島県 知事 飯泉嘉門氏	
「コウノトリが飛来し、ホンモロコが育む 渡良瀬の未来」	80
栃木県小山市 市長 大久保寿夫氏	
総括 東京都市大学 教授 涌井史郎氏	88

講演者プロフィール



韓国順天市 市長 趙忠勳氏

順天市出身。中央大学校大学院行政学科にて修士課程修了。2002年7月第4代順天市長に就任。2006年6月まで務める。2012年4月に再任。現在2期目。市民が幸福に暮らせる地域づくりのために、湿地生態系の保全、ならびに庭園都市、エネルギー自給自足都市の構築に向けた取り組みに力を注いでいる。2013年、庭園博覧会としては韓国初の順天湾国際庭園博覧会2013を開催、その目的を急速な都市の拡大から湿地生態系を守ることに定めた。

鹿児島県出水市 市長 渋谷俊彦氏

1967年東洋大学経済学部を卒業後、1968年4月より6年間代議士秘書として勤務。1982年から1995年まで、出水市議会議員を4期務める。その間、副議長、監査委員として活躍。1999年6月より旧出水市長として2期務め上げた後、2006年4月合併後の出水市長に就任。現在3期目を迎え、日々、市政発展のためにたゆまぬ努力を払っている。趣味は、読書と散歩。



山口県周南市 市長 木村健一郎氏

山口県周南市出身。早稲田大学法学部卒業後、1981年5月司法書士事務所開業。2003年4月山口県議会議員選挙に当選。2011年4月周南市長に当選し現職。現在2期目。趣味は読書、めだかの飼育、ネコと散歩。座右の銘は「和して同ぜず」。



新潟県佐渡市 市長 甲斐元也氏

東京農業大学を卒業後、1970年新潟県庁入庁。佐渡農政事務所所長、下越農政事務所所長、地域農政推進課課長、糸魚川地域振興局局長などを歴任。2006年県庁退職。同年より2年間社団法人新潟県農林公社の理事長を務める。2008年7月佐渡市副市長に就任。2012年4月佐渡市長に就任、現在に至る。趣味は、風呂でリラックスすることと料理。

島根県出雲市 市長 長岡秀人氏

岡山大学法文学部を卒業後、法務省法務教官を経て平田市職員となる。1999年7月に平田市助役、2003年4月に平田市長となる。2005年3月、市町合併により誕生した新「出雲市」で、市長職務代理者、助役、副市長を務め、2009年4月に市長就任。現在2期目。「げんき、やさしさ、しあわせあふれる縁結びのまち 出雲」の実現を目指し日々取り組んでいる。趣味は、読書、囲碁、ゴルフ。





宮城県大崎市 市長 伊藤康志氏

1968年宮城県小牛田農林高等学校卒業。1987年4月宮城県議会議員に初当選。以後、5期連続でトップ当選。2005年7月第33代宮城県議会議員に就任。2006年5月大崎市の初代市長に就任。現在3期目。一般財団法人宮城県青年会館理事、宮城県バイアスロン連盟会長としても活躍中。趣味は温泉めぐり、小旅行。特技は相撲と柔道。座右の銘は「耕不尽」。著書に『東北発「豊かさ」探求』（笹氣出版）がある。

兵庫県豊岡市 市長 中貝宗治氏

京都大学法学部を卒業後、1978年に兵庫県庁に入庁。県職員時代の1987年に大阪大学大学院経済学研究科経営学専攻前期課程を修了。1990年兵庫県庁を退職し、翌1991年4月、兵庫県議会議員に当選、以後3期務める。2001年7月豊岡市長に就任。2005年5月に市町合併による新「豊岡市」の市長に就任。現在3期目。好きな言葉は、“夢はでつかく 根は深く”、“願うこと 願い続けること 投げ出さないこと”。



徳島県 知事 飯泉嘉門氏

東京大学法学部を卒業後、1984年4月自治省入省。その間、山梨県総務部財政課長、埼玉県企画財政部財政課長、郵政省通信政策局地域情報化プロジェクト推進室長、総務省自治税務局企画課税務企画官などを務める。2003年徳島県知事に就任、現在に至る。全国知事会地方創生対策本部副本部長や全国知事会総務常任委員会副委員長などとしても活躍中。趣味は柔道、弓道、ピアノ演奏。



小山市 市長 大久保寿夫氏

1948年小山市寒川地区に生まれる。京都大学卒業後、東京大学大学院修士課程修了。1973年農林水産省入省、全国の農政業務に尽力。1986年外務省勤務。在中国日本国大使館一等書記官として3年間赴任。トキの橋渡し役を務め、自然の重要性を認識。1990年岡山県勤務。地方自治体の立場で行政職務を担当し、国営汚泥除去事業の創設に尽力。1997年農林水産省本省・室長、1999年関東農政局建設部次長を経て、2000年7月小山市長に就任。現在4期目。

東京都市大学 教授 涌井史郎氏

神奈川県鎌倉市出身。造園家・ランドスケープアーキテクト。人と自然の空間的共存を図る造園技術をベースに、数多くの作品や農村・水源地域・地方都市の活性化計画などを手がける。岐阜県立森林文化アカデミー学長、名古屋環境大学・学長、愛知学院大学・特任教授、中部大学・東京農業大学客員教授。国連生物多様性の10年委員会委員長代理をはじめ、多くの役職を務める。『景観から見た日本の心』（NHK版）、『いなしの智恵～ 日本社会は「自然と寄り添い」発展する』（ベスト新書）など、著書多数。



開会挨拶

(公財)日本生態系協会 理事 八千草薫



皆様こんにちは。公益財団法人日本生態系協会の理事をしております八千草薫でございます。開会にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、『国際シンポジウム 地方創生に求められるもの 地域と世界を結ぶ』を開催いたしましたところ、このようにたくさんの皆様にお集まりいただき、まことにありがとうございました。ご多忙のなか、また遠路より、足をお運びいただき、関係者一同、心より感謝を申し上げます。また、開催に際しましては、内閣府、環境省、国土交通省などの政府省庁をはじめ、様々な機関・団体様よりご後援、ご協力を賜りましたことを、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

自然を大切に思われる皆様と同じ思いの私ですが、私は子どもの頃体が弱くて、小学校2年生のときに、大阪から自然の多い神戸の六甲に転校いたしました。学校は当時として珍しい近代的な学校でしたが、小さな山を背にしている、その山をしばらく登っていくと、少し開けた木立の中に机と椅子だけがある空間がありました。いわゆる林間学校ですね。青い空と緑一杯の木立の中で勉強しながら、鳥や昆虫や、いろいろな生きものと一緒に時間を過ごしました。たまにはヘビが出て来たりもしました。様々な生きものという環境は、子どもにとっても最高に心地よい空間でした。こうした子ども時代は、今もずっと私の中で強い影響を与えているような気がいたします。自然と一緒に生きること

の大切さを痛感します。

今日は、自然を守り、生きものと共存することで、地域の活性化に成功している自治体の皆様のお話がたくさんうかがえるということで、私も大変楽しみにしているところでございます。本日の地方創生シンポジウムを通じて、少しでも日本の地方を元気にするお手伝いができることを願いつつ、簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

来賓挨拶

環境省自然環境局長
奥主喜美氏



ただ今ご紹介いただきました、環境省自然環境局長の奥主でございます。本日は日本生態系協会主催のもと、「国際シンポジウム 地方創生に求められるもの 地域と世界を結ぶ」が盛大に開催されますことをお慶び申し上げます。また、このような場にお招きいただき、ご挨拶の機会をいただきましたことに心から感謝申し上げます。

さて、本シンポジウムの趣旨にございますが、私たちの暮らしは、森里川海の豊かな自然に支えられています。自然の恵みが私たちの暮らしを支えていることを都市の人々を含む、国民全体に実感していただき、森里川海を豊かに保ち、その恵みを支える社会づくりを目指していくことが必要でございます。本日も報告がある、韓国順天市や日本各地の地方自治体の取り組みは、その実現に向けた先進的な取り組みであり、まさに今後の地方創生のあり方を考える上でも大いに参考になるものであると考えております。

これまで環境省では、トキやタンチョウ、コウノトリ等がすめる豊かな生息環境の保全を持続可能な地域づくりにつなぐ取り組みや、生物多様性の保全とその利活用に取り組む自治体のネットワーク化などを支援してまいりました。こういった取り組みをさらに進めるため、昨年12月より「つなげよう、支えよう、森里川海プロジェクト」を開始しています。先月からは、全国約50カ所での「リレーフォーラム」を開催しており、全国の多くの皆様のご意見を

いただきながら、地方創生にも資する具体的な取り組みを展開していきたいと考えております。

最後になりますが、このシンポジウムを通じ自然と共存する持続可能な地域づくりの取り組みが地方創生の原動力となり、さらに全国に広がっていくことを祈念し、私からのご挨拶とさせていただきます。

来賓挨拶

自由民主党地方創生実行統合本部 本部長 鳩山邦夫氏



こんにちは。鳩山邦夫でございます。

私は、池谷会長を心から尊敬いたしております。長いおつきあいをしております。池谷会長からいろいろ教えていただいたことを基に、環境の勉強も随分させてもらったつもりでございます。そういった意味で、今日はこのシンポジウム、有意義な一日になることを心から願っております。

実は、池谷会長と初めてお会いしたときにある質問をしたのです。私はチョウの研究家で、論文も書いています。夜のチョウじゃありません、昼間のチョウチョです。長野県の信濃追分周辺で、今から30年くらい前にチョウの宝庫を見つけました。これはすごいと思いました。子どもの頃から別荘暮らしを随分してきたけれど、こんなに種類のチョウがひとつの林道にいるというのはびっくりだと思って、10年近く楽しんでいました。ところが、ある時その林道が舗装された。翌年行ったら、チョウが10分の1もいない、20分の1もいないのです。そこで、「これは生態系的にみるとどうということなのですか」と、初対面の池谷会長に聞きました。

すると、「これがまさに開発による生態系ピラミッドへの影響なのです」と池谷会長は言いました。つまり、道路が舗装して壊される前は、底辺が大きいから生態系ピラミッドも大きかった。しかし、道路を舗装してしまえば底辺が縮小するので、生態系ピラミッドも小さくなってしまう。だから、チョウがいなくなるのは当然なのだということでした。これから

は、舗装にしても、透水性舗装など生態系が生き残れるような技術を開発しなくてはだめですねというようにお話をしました。

その後もいろいろなことを教えていただきました。環境ホルモンについての勉強も随分やりました。最終的には自然生態系と人間の活動、いわゆる産業活動は、ひとつのものの領地の奪い合いになるのかもしれない。だから経済と環境の調和が必要だと環境省や環境大臣は平気で言いますが、これが実際は大変難しい。しかし、これができれば、我が国の社会は永続できる。

でも、ただ当たり前にやったのでは永続性を欠くということになります。たとえば太陽光発電。これはある意味では、エネルギー的にも環境的にも素晴らしいものだと思いますが、我々チョウを追いかける者としては、一概にそうとは言えない側面もあります。ここはよい環境だったという場所に、大規模な太陽光発電施設ができる。最近これは環境破壊の一因にもなり得ると思うことがあります。

カール・マルクスという人は評価していないし、資本論もほとんど読んだことがないのですが、ただマルクスさんが言ったことで正しいと思うことは、「経済が下部構造で、経済の上に政治とか法律とか文化とかいうものが上部構造としてある」ということです。これだけは正しいのだらうなと思っています。けれども考えてみると、経済の下にはさらに下部構造、土台がある。それが自然生態系という

ものではないかと思っています。

私は自民党の地方創生実行統合本部の本部長に10日前になったばかりですが、地方創生というものも、まさにその境目にあるような気がします。自然環境と経済、あるいは経済だけではなく、人口や雇用の問題もありますが、地方創生はその境目にあるような気がします。自然生態系を無視したり、破壊したりするような地方創生というものは、大都会の真ん中ならあり得るかもしれないけれど、一般的にはあり得ないし、日本の将来に暗い影を投げかけるものになるだろうと思います。

したがって、私はこれをずっと言い続けていますが、あくまでも生態系を重視した、自然との共生というものを軸として地方創生をやっていきたい。そういう気持ちで私はこれから仕事をしていこうと思っています。皆様方のお知恵を是非とも拝借できますようお願いしながら、今後、自然環境、生態系というキーワードを軸にして、日本の国が発展することを心から期待してご挨拶いたします。ありがとうございました。

来賓挨拶

国土交通省水管理・国土保全局長 金尾健司氏



皆さん、こんにちは。国土交通省水管理・国土保全局長の金尾でございます。本日は国際シンポジウムの開催、まことにおめでとうございます。ご参加の皆様には、日頃より国土交通行政、とりわけ河川行政に格別のご理解、ご協力をたまわっておりますことを、この場をお借りしまして厚くお礼を申し上げたいと思います。

さて、本日のシンポジウムでは、大型の水鳥類のトキ、コウノトリ、ハクチョウ、ガン、ツルに関するご発表があるとうかがっております。トキやコウノトリは、古来から日本に生息していたものの、一時は野生絶滅した鳥であります。それが今、ここにお集まりの皆様のおかげによりまして、再び日本の国土に羽ばたいており、さらには、今やひとつのブランドとなり、それが結果として観光資源にもなり、地域の元気づくりにも役立っているとうかがっております。

豊かな自然環境を育む場でもある河川は、このような水鳥が生息するための健全な生態系ネットワークを形成する上で、重要な役割を担っていると考えております。平成9年には、河川法に河川環境の整備と保全が、法の目的として位置付けられてから、河川整備のあらゆる機会を通じて多自然川づくりに取り組むこととして、自然環境や地域の歴史文化などから見て、より魅力のある川へと整備していくことを基本として、取り組んでまいりました。

生態系ネットワークの形成に関しましては、本日も発表いただきます、島根県出雲市の斐伊川、兵庫県豊岡市の円山川、栃木県小山市の渡良瀬遊水地について、当省も様々なお手伝いをさせていただいております。地域の水辺環境の向上が、地域の宝を磨くことにつながり、地域の活性化にも役立ちますように、是非、国土交通省としても努めてまいりたいと考えております。

本日の講演などを通して、河川における自然環境の保全・再生に関する皆様のご理解が深まるとともに、本日のシンポジウムが実り多いものとなりますことを心から祈念をいたしまして、挨拶いたします。どうもありがとうございました。



趣旨説明

(公財)日本生態系協会 会長 池谷奉文



皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました池谷でございます。本日は大変お忙しいなかを多数おいでいただきまして、ありがとうございます。

昨日、韓国の順天からおいでになりました市長さんと親しく懇談の場をもたせていただきました。少し前にドイツの方から、「最近の国際情勢を見ると、中国・韓国が自然再生に力を入れていて、日本はそれに一步遅れをとったのではないか」という話がありました。ああそうなのかと思って中国へ行ってまいりました。そうしましたら、中国が凄い勢いで自然再生をやっておりました。この5年間で1250万haという膨大な面積で木を植えています。韓国でも同様に大変な勢いで自然の回復を行っていました。

そういうなかで、順天市の市長さんのお話を聞きまして大変びっくりいたしました。「20世紀は工業の時代だった。しかし、それは多くの資源を消費し、多くのゴミを出して、決して持続可能なものではなかった。21世紀は自然と生態系を利用して経済を活性化させ生きていく時代だ」とおっしゃったのです。すごいなと思いました。そこまで言い切れる市長さんは、日本ではまだ少ないのではないだろうかと思いました。

順天市長さんからいただいたお土産をご覧ください。ムツゴロウのオカリナです。「順天市はムツゴロウやツルが健全に生きていける環

境を維持したい。こうした生きものが順天市の大元となっているのだし、それらを持続的に生かしながら発展していく、それが順天市だ」ということでした。このムツゴロウはそれを象徴するものです。順天湾の干潟に住んでいるムツゴロウを大切に思い、それで記念品を作る。ムツゴロウを大切にしているという心根がよく伝わってきます。大変素晴らしいと思いましたし、心から感動いたしました。

そういうなかで、日本はどうかということでありま。地球ができて45億年以上になります。約28億年前、地球上に生命が誕生したころの夜明けの様子はこのような感じだったのではないかと思います(図-1)。ごろごろとした石のようなものがありますが、石ではありません。ストロマトライト、生物です。酸素を作っているのです。泡が見えますが、あれは

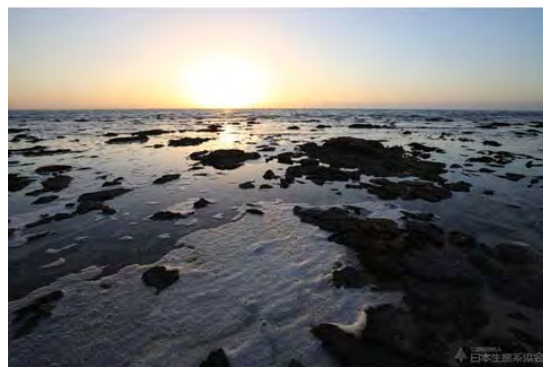


図-1

酸素の泡です。今のこの21%の酸素の源です。まさしく今の地球上の自然生態系を生んだ大元です。

しかし、その地球を、大量生産、大量消費、大量廃棄などによって、人類が大分痛めてしまいました。大量生産が始まったのがつい100年程前です。ストロマトライトが酸素の供給を始めてから約28億年経っていますが、たった100年の間に、地球温暖化という異常な状態にしてしまったということです。当然、大水が出る、強風が吹く、台風が巨大化するなど、いろいろな問題が起こってくるわけです。このままのかたちで文明を続けるということは大変難しい。そういう時代を我々は今迎えているわけです。

日本の現状を見てみましょう。まず山です。日本の国土の67%は森林です。しかし中身を見ますと、健全な自然生態系を保っているところは非常に少なく、十数%しかありません。ほとんどがこういった人工林であります(図-2)。スギ・ヒノキの単純林で、生物多様性がほとんどない状態です。それどころか、ここに雨が降りますと、膨大な土壌が流れていきます。過去の例を見ますと、土壌を失った国は滅びるという結末が待っています。そういったことが、現在日本でも起こりつつある、これが日本の山の現状です。

平地へ行きますと田んぼがあります。我々の食

料を作ってもら大変ありがたいものでございまして、これからもずっと頑張ってもらいたいと思っているわけです。しかし、最近では、FTAとか、EPA、TPPという経済の自由化の流れの中で、大きく縮小しそうだという話があるわけです。しかし、経済の自由化やTPPということ、持続可能な社会というスケールで見たとき、本当に自由化の方向がよいのかどうか、私はさらなる議論の必要性があるだろうと思っております。しかし、今現実としては、その方向で行くことになっております。現在でも日本の農地は約40万haが使われずにいるわけです。それをどうするのか。私はやはり、使わなくなった農地は自然に戻すということが必要だと思っておりますし、そうした議論が必要だと考えています。

次はまちでございまして。これを見た限り、少なくとも健全な生活ができるまちづくりだとは思えないのであります(図-3)。人間という一種類がゴチャッと住んでいる。これでよいとは思えないのです。このことは、とくに子どもたちに大きく影響します。将来を担う子どもたちをこういう環境で育てることは、決して良いことではありません。我々大人にとっては利便性が高くて良いということになるのですが、持続可能な社会という観点からすると、やはり、議論が必要だと感じるわけです。

まちの中を見ますと、自然をつなぐ役目を果た



図-2



図-3

す川はこういう状況になっています(図-4)。これでは生きものがいなくて寂しいということで、こういうものを置こうということになります。これが日本の川の現状です。日本には109の一級河川があります、そのうち108の河川にダムがあります。もちろんダムを造っていただくと、洪水が防げるし、いつだって水が飲めるし、農業用水も確保できる。必要なもの、大変ありがたいものではありません。我々現代世代にとってはありがたいものですが、将来世代にとってはどうでしょう。造ったものは全て老朽化していくという法則があり、こうしたダムもいずれ老朽化していきます(図-5)。古くなったダムを将来どうしていくのでしょうか。しかも、ダムを造ることによって川が堰き止められますから、環境にかなり大



図-4



図-5

きな負担がかかっています。自然生態系は今後大変重要になってきます。ダムと自然生態系をどう調和させるのか、きちんと話しあっていく必要があると思います。

道路も全く同じであります。道路ができることによって流通が改善されます。より豊かな生活ができるので、私たちの生活にとっては良いということになります。しかし、持続可能な社会という観点からすると、こうした道路もやがては老朽化していきます(図-6)。それどころか、石油、石炭という資源も有限で、これからは枯渇していくという時代を迎えます。

数年前、ドイツの大手の自動車メーカーを訪れた際、経営者に、これからの自動車産業をどうご覧になりますかとうかがいました。その答えとして、「自動車産業は、ハイブリッドや電気自動車に移行する時代を迎えています。しかし、それは長くは続かないと思います。近い将来、我々の仕事はなくなると覚悟しています」と言いました。自動車メーカーの方の発言です。すごいことだと思いませんか?今後こうしたことを踏まえて、日本の道路はどうするのかを考えていく必要があります。

持続可能な社会を築くためには、やはり人間の生存基盤である自然生態系をきちんと守ることが第一なのです。健全な生態系、つまり、タカ



図-6

やフクロウとか、タンチョウヅルやハクチョウ、山にはイヌワシですとか、そういった大型の鳥たちが住んでいる環境を保障する、守る、または取り戻すということが第一の公共投資なのです(図-7)。それをやらないと持続可能な国は構築できない。そうした野生の生きものたちが暮らせる自然環境を残してつないでいくこと、これがエコロジカルネットワークです。これからは都市計画、地域計画の根幹に据えるべき原則であります。ヨーロッパでは、各都市がこういった自然を塊で残してつないでいくのだということを、計画図などにして市民に明確に示しながら、まちづくりをしています(図-8)。日本でも全国の市町村で、こういった図を持つ必要があるだろうと思います。

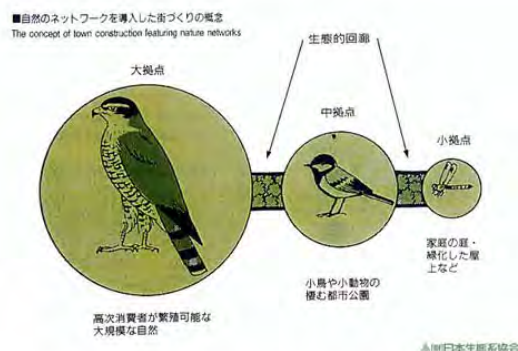


図-7



図-8

そうした流れのなかで、日本もやっと自然再生に動き出しました。豊岡で、また千葉で、コウノトリが大空を舞う時代を迎えました(図-9)。そして、佐渡の空を飛ぶ大変美しいトキが、やがて日本全国に広がっていくのだろうと思います。昔は国内様々なところにいたコウノトリやトキが、また全国に広がっていくという期待が高まります。生態系の頂点にいるコウノトリやトキを守ることが、国づくりの重要な土台になるわけです。

ここでひとつだけ注意しなければならないのは、単に自然再生だけをやればいいということではありません。重要なもう一つの要素があります。それは美しさです。単なる竹林では十分美しくないですが、ちょっと手を加えるだけで大変美しくなって、多くの人が訪れるようになります。これが経済活性化の大本です。21世紀は、持続可能な国のベースとなる自然と文化が共存する美しいまちをどう発展させていくかということになると考えます。これからの日本には是非そう変わってほしいと願っています。

本日のシンポジウムは、そうしたことを皆様と共に考えたいと思います。このムツゴロウさんに感謝をしながら、私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。



図-9

特別講演

順天湾と順天湾国家庭園

効率的な保全と持続可能な発展による創造経済効果

韓国・順천시 市長 趙忠勳氏

皆様、こんにちは。私は、韓国からまいりました順天市長の趙忠勳(チョ・チュンフン)と申します。本日は、このような国際シンポジウムにお招きいただき、特別講演として順천시をご紹介できることを、大変嬉しく思っております。

これから順天湾と順天湾国家庭園を中心に、効率的な保全とサステナブルな発展による地方経済の発展の事例についてお話をしたいと思います。まず、順천시についてご紹介いたします。順천시は韓国の南端に位置する小さな都市ですが、人と生態系、環境、文化が共存する都市としては韓国を代表しています。順천시は、北東アジアに伸びる地政学的な要所として、北東アジアの物流の中心拠点、光陽港と、2012年の万博を開催した麗水市が隣接する都市です(図-1)。順天市の

人口は約28万人ですが、面積は首都ソウルの1.5倍あります。山と川、海と湖があり、調和のとれた自然環境に恵まれています。また、韓国仏教の二大宗派の曹溪宗と太古宗の本寺がありまして、多くの文化財のある、歴史的なまちでもあります。

私のプレゼンテーションでは、順天湾と順天湾国家庭園についてご紹介した後、順天湾の効率的保全政策について、それから順天湾国家庭園の持続可能な開発による創造的経済効果というような順番でお話をさせていただきたいと思います。

まず、私どもがスローガンとして使っている「庭園都市順天」について説明いたします。これは、順天は都市の中に庭園があるのではなく、庭園の中に都市があるということなのです。それではここで、短い映像をみていただきたいと思います。「順天は、もはや都市ではありません。庭園です。明るい人々が暮らすまち。ここは庭園の都市、順天です。順天の未来、百年の飛翔。韓国の新たな庭園都市の歴史が、ここ順天から始まります。韓国、順天湾の庭園」。

順천시では、順天湾の保全のために、湾岸地域を絶対保全地区に指定しました。そして都市化の拡大を抑え、順天湾を永久に保存するために、専門家の提案に従って、都市部と順天湾の間の空間にエコベルトをつくりました(図-2)。このエコベルトこそ、2013年に開催した、庭園博覧会の会場となった場所です。



図-1

続いて、順天湾と順天湾庭園の紹介です。8千年の歴史ある地上の楽園、順天湾は、韓国の南海岸に位置しています。順天湾は2006年、韓国で初めてラムサール条約に登録されました。2,260haの広大な干潟と540haのヨシが生い茂る風景は壮観です(図-3)。240種以上の渡り鳥が飛来し、120種以上の植物、300種以上の生物が共に生きる順天湾は、守らなければならない地球上で数少ない生態系の宝庫だと言えます。ここには世界的にも珍しい絶滅危惧種の野鳥25種が生息しています。毎年、冬になると、日本の出水市にも多く飛来するナベヅル、それからヘラサギなど、数千羽の渡り鳥が訪れるところでもあります。

順天湾では、2013年に、「地球の庭園・順天湾」

というテーマで庭園博覧会が催されました。2013年4月から10月までの半年間に、440万人が訪れました。そして、今年の9月5日、順天湾は「順天湾国家庭園」に指定されました。韓国第一号の国家庭園として、韓国家庭園文化をリードしています。韓国のこの庭園文化は、20世紀は産業文化の時代でしたが、21世紀は人間の生活の質を向上させる時代だという国民の要請から来た考え方です。人々の幸福の実現というコンセプトから端を発したものだと言えます。こちらは順天湾国家庭園のメイン会場であったところです(図-4)。真ん中にありますレイクガーデンは、世界的な造園家であるチャールズ・ジェンクス氏が設計したもので、順天市の山や川、都市を表現しています。

続きまして、順天湾の保全についてお話したいと思います。私は2002年7月に、順天市長に就任いたしました。就任するやいなや、人々の利己心で汚された順天湾を効率的に保全し、持続可能に利用するための方策を実行に移しました。とくに、政策的な中心課題について、先ほども申し上げましたが、産業時代から移行し、生態系の保全こそが時代のトレンドになると考え、政策の重点をそこに置きました。

1990年代には、順天湾開発への反対運動がありました。2002年には順天湾に流れ込む河川の水



图-2

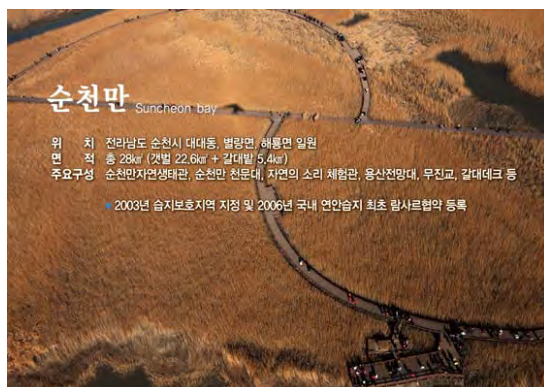


图-3



图-4

質改善に取り組みました。これは順天湾における保全の取り組みのスタートだったと言えます。そして、順天湾の湿地保全区域を指定しました。2006年にラムサール条約湿地に登録され、2013年には庭園博覧会が開催されました。今年の9月には、国家庭園の指定を受けました。ここまでたくさんの紆余曲折がありました。しかし、市民とともに順天湾を守ることを市政の中心課題に据えた結果、私たちは「庭園都市」という新たなブランドを得ることができたのです。

振り返ると、そこには胸が痛むような歴史もあります。これは1990年代の順天湾の写真です(図-5)。他の沿岸地域と同様、違法なゴミ投棄が後を絶たず、失われた土地になっていました。1997年に

は、骨材採取による干潟の破壊が進み、干潟はなくなりかけていました(図-6)。私が市長になって真っ先にやったこと、それはこの骨材採取の許可を取り消すことでした。思い返すと、これが湿地保全の取り組みの最初のボタンがかけられた時だろうと思います。これは以前の順天湾の様子です。たくさんの釣り船が10ノット以上のスピードを出して、干潟の堆積層を侵食させていました。また、周りの倉庫や食堂などが景観を損ねていました。また、順天湾には干潟を埋め立ててアヒルを飼う農場もありました(図-7)。悪臭と汚水が湾を汚染していた、そのような状態だったわけです。

私はまず、2002年に順天湾自然生態館を建てて、湿地の保全と持続可能な利用計画というもの



図-5



図-7



図-6



図-8

を策定いたしました。駐車場となっていた場所と川の土手を内陸湿地として復元させました。そして、渡り鳥の休憩地をつくり、順天湾の復元を通じて生物多様性を復活させ、エコツーリズムの観光資源に作り変えました(図-8)。湾内にあった食堂は、湾の外に移転させました。ナベヅルを観察するようなバードウォッチングセンターをつくりました(図-9)。渡り鳥の生息に支障をきたす釣り船は、補償金を払って運航を禁止させました。代わりに体験型のエコシップの制限運航を行いました。

当時、順天湾を訪れる人は、せいぜい10万人ほどでした。その人たちは、専門家として湾の調査をする人や学生、カメラマンなどでした。その後、順天湾を訪れる人たちが、50万、100万、200万人と

増加していきました。順天湾の保全によってナベヅルが79羽確認されました。

順天湾近隣の耕作地は59haあります。ここは環境に優しい景観農業として耕作を行っております(図-10)。ここで農業を営む農家は92世帯あります。春先に田植えをして、順천시から収穫金額の70%がまず支給されます。農業については、ナベヅル営農団という7人の住民代表グループの人たちが、秋の収穫時まで管理を行います。したがって、土地の所有者は、自分の田んぼに水をやったり、農薬をまいたりしなくてもいいのです。刈り入れが終わると、この土地の所有者たちは、残り30%の残金を受け取るというようなシステムになっています。

昔、順天湾に飛んでくる渡り鳥が、電柱に引っかって傷を負ったり、感電死したりすることがしばしばありました。こうした電柱は、もともと農家の人たちが、自分の田んぼに水を優先的に引こうとして設置したものでした。現在は、電柱を全部引き抜いて無くしました(図-11)。そして、水の管理も、ナベヅル営農団が行っています。水を順番に供給して、ひどい日照りのときには用水ポンプで汲み上げるということをしています。今では、水をめぐる住民同士のいさかいもなくなりました。渡り鳥の安全で大きな古巣ができたというふうに思います。



図-9

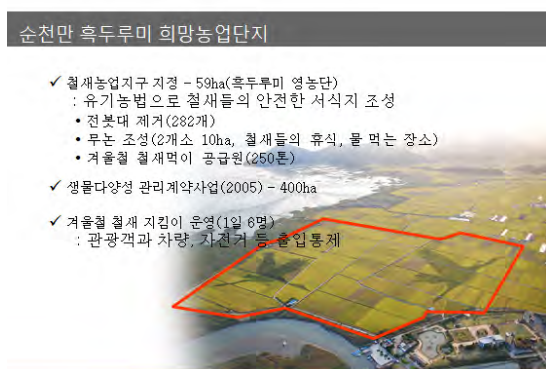


図-10



図-11

順天湾周辺の農家では、エコ農業で景観農業というものを実践しています。渡り鳥に餌を与え、新たな観光資源を自ら創り出しております。もちろん、当初は市当局と農家との間に対立などもありましたが、話し合いによって協力を得ることができました。ここで作られたお米は、一般のお米より約1.5倍高く売られています。周辺農家にとっても、収入という点で大きな助けになっていると言えます。春になるとアートファームでデザインを行います。先ほどお話ししたように、ほとんどの農地は、ナベヅル営農団という住民グループによって耕作が行われています。田んぼのうちの1枚は、近くの小学校の小学生が、体験農業ができるように提供されています(図-12)。

夏になると、順天湾のヨシと田んぼは、全て緑に染まります。農地には毎年異なるテーマが与えられます。今年は、ご覧のとおり、「命の土地順天湾、ナベヅルのまち順天」という文字を浮かび上がらせ、図柄はナベヅルと丸いヨシ原を表現しました(図-13)。秋には稲の刈り入れをします。エコ米を求める観光客に、私たちの取り組みについての話をしたり、ナベヅルのお米を販売したりします。冬には、順天湾に飛来する渡り鳥にエコ米を分けてあげます。私たちは、これを餌やりというふうには呼んでいません。食べ物を分かち合うという表現をして

います。

順天市が景観農業に充当する予算の全てが、観光産業の活性化に使われているわけではありません。私は順天湾を訪れるナベヅルの保護と住民の参加を促すことこそ、もっとも重要だと思っています。冬場になると、営農団の代表は、ヨシで垣根を作って農耕地全体に光が入り過ぎないようにしたり、車が入って来られないようにしています(図-14)。

このような努力の結果、2008年には新しいことが起きました。生徒35人の廃校寸前の小学校がありました。2009年に順天湾体験学習モデル校に指定され、「ナベヅルの田んぼづくりプロジェクト」を始めることになりました。このことによって、廃

흑두루미 영농단의 여름 관광객에게 볼거리를 제공합니다



図-13



図-12

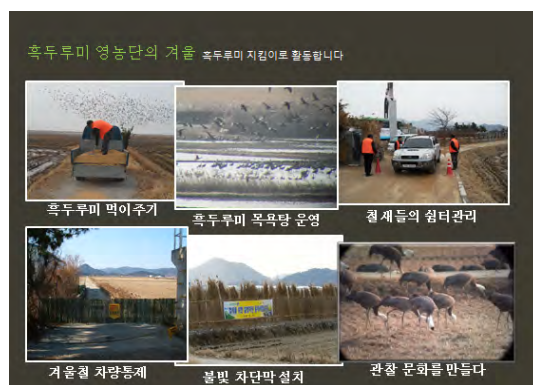


図-14

校寸前だったこの小学校の生徒数は、35人から120人に増えました。現在、入学希望の待機児童が増加しています。ナベヅルが順天湾の村を再生させたのです(図-15)。その小学校の生徒たちが描いたナベヅルの絵です。日本の出水市との交流の一環で、12月から出水市で展示される予定になっています。

先ほどお話ししましたように、ナベヅルは1990年後半に飛来が確認されました。当時、79羽だったナベヅルは、去年1,005羽まで増加し、順天市はナベヅルのまちとなりました。今年は1,200羽が越冬し始めています。このことによって、冬に多くの人が順天湾を訪れるようになりました。地球上には、12,000羽ほどのナベヅルがいると言われています。そのうち11,000羽が日本の出水市に飛んでいきます。順天市の目標は、越冬するナベヅルの数を1,000から5,000羽にすることです。

ナベヅルは、単にこの鳥の保護だけで増加するわけではありません。それは順天湾の保全指数と一致すると私は思っています。会場にいらっしゃる出水市の渋谷市長にもご同意いただければ嬉しいと思います。ナベヅルの増加は観光客も呼び込みました。2002年に10万人だったエコツーリズム客は、昨年は235万人に増えました。これは韓国ウォンで1,200億ウォン、日本円で言えば約120億

を上回る地域経済の誘発効果を生み出しております。

順天湾は地球上で最もよく保全された世界5大沿岸湿地のひとつです。まるで水彩画のように美しい景観です。春夏秋冬、四季折々の景観が楽しめます。朝晩の景色、雨の風景、それから晴れた日と、またそれぞれの異なる風景が広がります。ご覧になっているのは春の風景です。これは夏の風景です(図-16)。これは秋の風景です(図-17)。これは順天湾の冬です。真っ白な雪の中に咲いている赤いシチメンソウの姿というのは、美しさと共に生命力の力強さも見せてくれています。

私たちは、順天湾保全のために産官学の協力体制を構築しました。順天湾の主な政策は、順天



図-16



図-15



図-17

湾自然生態委員会のもとで事前に協議し、話し合いを行って決めていくことになっています。順天湾の保全で重要なのは、地域住民の役割だと思っています。当初、順天湾の農家の人たちは、順天湾の利用に制限が加わるということで反発をしまして、ヨシ原に火をつけたこともありました。けれども、今では、住民自らが刈り取ったヨシの荷を交互に積み上げる作業や、ヨシのお茶を開発するなど、住民みずからが様々な事業を積極的に行っています(図-18)。これは地域住民の雇用と所得拡大に一役買っています。毎年4月頃、ナベヅルが繁殖地に飛んでいくと、人々はヨシの刈り取り作業を行います(図-19)。住民自らがヨシを使って、観光客の休憩場所や垣根なども作っています。



図-18

それでは、次に順天湾の永久保存のための悩みから、国家庭園の誕生までについて、ご説明したいと思います。これは2008年の順天市の様子です(図-20)。順天市は都市の膨張などにより、順天湾の汚染の拡大を経験しました。湾の動植物の個体数は、急激に減少しました。そこで順天市は、都市の膨張から順天湾を守る目的で、順天湾と都市部の間の地域をバッファゾーンとするために、庭園博覧会の会場を設けることにしたのです。

2009年に、2013年開催予定だった庭園博覧会のマスタープランを策定しました(図-21)。そして、順天湾保全のために、都市とつなぐ土地の利用計画というものを策定しました。この庭園博覧会の開催は、市民運動から始まったものです。人々が



図-20



図-19



図-21

立ち上がり、一坪ガーデニング運動などの市民運動が始まりました。これには順天の各機関や団体のみならず、主婦から学生まで、みんなが参加して1,000人のボランティアチームが作られました。

順天湾国家庭園について少しお話ししましょう。先ほど申しましたように、第1番目に、この庭園博覧会の会場は、順天湾沿岸への都市部の拡大を抑えるために創出された生態軸、エコベルトだと言うことができます（図-22）。生態学的な機能をもった湿地保全のための庭園だということです。2番目に、この庭園博覧会の場所は、たびたび浸水するような農地を利用しました。博覧会場は、通常は庭園として観光スポットになっていますが、集中豪雨などのときには、洪水を調節する遊水地としての機能を発揮します。庭園以外の機能をもった科学的な庭園だということです。3番目に言えるのは、順天湾と都市部の間にあって、順天湾を訪れる観光客を都心部にも誘導できる位置にあるということです。言い方を換えるならば、地域活性化の機能を持つ経済効果の高い庭園だと言えると思います。

庭園博覧会は、2013年4月から10月までの6カ月間開催されました。総来場者数440万人を動員し、大成功した博覧会として評価されています。地方の小さい都市で開催された庭園博覧会でし

たが、韓国に「庭園法」という新しい法律を誕生させる機会にもなりました。韓国中央政府の第一号の国家庭園と指定されることによって、韓国で今までなかった庭園文化が花開ききっかけとなりました。順天市は、庭園産業のブルーオーシャン・メッカとして呼ばれるようになりました。

これは順天湾国家庭園の博覧会のメイン会場であるレイクガーデンの写真です（図-23）。これは韓国の伝統的庭園と樹木園、それから庭園博覧会のテーマ館となっていた国際湿地センターの写真です。これは博覧会に訪れた多くの人々の写真です。駐車場もいっぱいになりました。1日に10万人の来場者が訪れました。こちらは子どもたちの夢を運ぶ、世界初の浮かぶ橋の美術館、夢の橋とも呼ばれています。コンテナ30個で作りましたが、世界の子どもの絵14万点が展示されました。

庭園博覧会では、ヨーロッパからアジアまで、各国の歴史と伝統の庭園文化を1カ所で見ることができました（図-24）。世界庭園には11の庭園がありました。こちらがフランスと中国の庭園です。オランダ、タイ、イタリア、イギリス、日本の庭園です。日本では、佐賀県と高知県が庭園を造ってくれました。世界的なデザイナーが参加したテーマ庭園です。レイクガーデンは、チャールズ・ジェンクス氏が山と順天の都市を表現しました。また、ミミズの

순천만정원의탄생

정원박람회 개최 배경

순천만의 보전정책을 기반으로
경관와 문화 도시디자인

도심-순천만의 중간 지점에
에코벨트 조성

도심팽창 억제
미래도시가 가야 할 방향 제시

자연경관의 훼손을 막아
순천만을 영구적 보존

ECO GEO 2013 순천만
국제정원박람회



図-22



図-23

仲間、ゴカイが通る道は、英国のチェルシーのガーデニングショーで2年連続金メダルを取ったファン・ジヘさんが、順天湾の干潟をイメージして造ってくれました(図-25)。こうした参加庭園は35ありました。ほかに迷路ガーデン、ロックガーデン、ローズガーデン、子どもの遊ぶ庭、都市の中の森などもありました。これは国内外の造園家が造った室内庭園です。国内外の自治体、企業、ガーデニングデザイナーたちが造ったこうした庭園は、クリエイティブで個性あふれる現代の庭園の様々な側面を見せてくれました。順天湾国家庭園の美しい風景です。

博覧会後にその跡地をどのように使うかということも重要な検討事項でした。順天市は、博覧会の

開催中に跡地利用のための専門チームを設置しました。そのチームを中心に、順天国家庭園というものを準備してきました。博覧会6カ月後の2014年の4月20日に、この博覧会の跡地を永久に保存するため順天湾庭園をオープンさせました。これは菜の花が満開の順天湾庭園の風景です(図-26)。順天湾庭園の夏の風景です。こちらは秋の風景です。雪が積もった冬の風景をご覧ください。

続きまして、現在私たち順天市が力をいれて推進している順天湾の湿地保全についてお話しします。まず、挙げられることが、「順天湾湿地保全条例」の制定です。順天湾と順天湾庭園の収入のうち10%を基金として積み立てております。こ

순천만정원의탄생



図-24



図-26

순천만정원의탄생



図-25



図-27

れて順天湾の生態系調査、市民モニタリング、国際協力事業と順天湾湿地管理計画を策定しています(図-27)。順天市は自然環境と文化資源を効率的に保全し、人間と環境が共存できる道を選びました。このために、順天湾の効率的な保全と賢明な利用計画を定期的に策定しております。順天湾の保全と持続可能な発展のために、地域住民とともに行う湿地フォーラムも定期的に開催しておりますし、民間ガバナンスの活性化を図っております。

順天湾が壊されないように、入場者の制限を設けております。1万人という制限枠を設置し、予約制で受け付けています。順天湾では民間主導でエコツーリズムを進めています(図-28)。昼には、順天湾で様々なものを見て、夜には近くの村で生態系の体験をしたりします。早朝にバードウォッチングなど、村の単位でエコツーリズムのプログラムを開発して、住民主導でこの取り組みを進めています。

現在の利便性よりも、次の世代に続くサステナブルなエコツーリズムの資源化、それから生態系の保全のために、私たちは湿地生態系の復元を試みております。あちこちで塩田が放棄されていましたが、この放棄された塩田と内陸部の湿地を復元する作業を行っております。これは政府のモ

デル事業にも認定されており、来年から本格的に開始される予定です。これもまた、地域住民の積極的な参加と理解があったからこそできることだと思います。これはスタート時の順天湾保全政策からみると、もうひとつの順天のチャレンジだと言えます。干拓地として埋められてしまった順天湾、この壊れた土地を解体して、元の本来の自然の姿に復元する作業を行おうとしているのです。

最後に、私は順天湾の保全と順天湾庭園の発展による経済効果についてお話しします。申し上げたとおり、この庭園博覧会は韓国に庭園法という法律を誕生させて、ついに今年9月5日には大韓民国第1号の国家庭園として順天湾国家庭園が誕生いたしました。9月4日でしたが、国家庭園指定の祝賀行事がありました。順天市にソウル広場がオープンして、前夜祭も含め、ソウル市民も一緒に祝ってくれました。9月5日には、国務総理をはじめ、国内外の来賓と共に、28万人の順天市民が、順天湾国家庭園の誕生を祝って嬉し涙を流しました(図-29)。

順天のチャレンジは韓国の庭園文化の先駆けであり、順天の政策が韓国庭園文化の目指す先となっています。また、順天の成功は庭園文化の歴史を新たに作っていることを、みんなが信じられるようになりました。専門家によると、順天湾国家



図-28



図-29

庭園の経済価値は、1兆97億ウォンになると分析しております。こうした庭園から、花類、造園、薬草、ビューティ部門など、様々な庭園文化産業が活性化すると思います。

順天市には、大規模な工場も産業団地もあります。でも、順天には、順天湾と順天湾国家庭園があります。順天市はこのようなことから、市民の幸福はもとより、自然生態系の価値を生かし、それを持続可能なかたちで活用するエコ経済、そして創造経済の成功を夢見しています(図-30)。このような順天は、韓国の中央政府が最も美しい景観をもつ都市に与える「大韓民国景観都市大賞」を受賞する都市となりました。また、韓国政府は毎年、最も持続可能な都市を決める都市大賞を選出していますが、順天市は、大統領賞を3回受賞する都市に生まれ変わりました。もうひとつあります。順天は韓国で首都圏を除いて、唯一の人口増加都市でもあります。

今しがた、順天からすばらしいニュースが届きました。私たちは、今年、順天湾に訪れる年間観光客数の目標を500万人と定めていました。まさに今日、これが達成できたという嬉しいニュースが飛び込んできたのです。ありがとうございます。こうした500万人の観光客たちは、順天市に新たな購買力をもたらして、都市経済力を育ててくれると信じて

おります。私たちはこれから地域経済、市場の規模をもっと拡大していきたいと思っています。私たちは、とくに市民の幸福というものを中心に据えて、さらに伸びる順天市、さらに美しい順天市を構築するためにこれからも努力していきたいと思っています。順天市は、順天湾を保護するという初心を忘れずに、自然と人間が共存できる都市、そしてこれを市民のエコ経済に結び付けるというような都市をつくるために、今後もベストを尽くしてまいります。と思っています。

長時間のご清聴に感謝申し上げます。ありがとうございました。

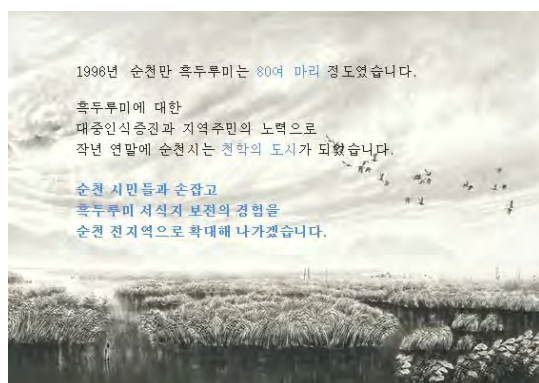


図-30

使用図版は全て順天市より提供



ご挨拶

地方創生担当
内閣府 特命担当大臣
石破茂氏



地方創生担当大臣の石破でございます。このような機会をいただき、まことにありがとうございます。「国際シンポジウム 地方創生に求められるもの 地域と世界を結ぶ」の開催にあたりまして、ご尽力いただいた皆様方に心から敬意を表する次第であります。

世界全体もそうだと思いますが、この国は今、後世から見れば、あの時が歴史の転換点だったという時期に差し掛かっていると思っております。今まで日本の国は、敗戦以来、営々と国民も努力し、GDP世界第2位、今は3位であります。そのような物質的な繁栄は達成いたしました。冷戦の存在、人口の増加、経済の成長、土地の値段の上昇、この4つの前提条件の下、我が国は今日まで国家を運営してきたし、それなりの繁栄を手に入れたのだと思っております。しかし2015年の今、考えてみますとこの4つは全て崩壊したと言っても過言ではありません。

人口はこれから大変な減少局面に入ります。今のままの出生率と死亡率が続いたという前提で、あと200年経つと日本人は1,391万人になる。約10分の1ですね。300年経つと日本人は423万人になる。西暦2900年になると、日本人は4,000人になり、西暦3000年になると日本人は1,000人になり、やがてこの国はなくなる。単純な計算をするとそのようなことに相成ります。これをもってサステイナブルと言うか、と言えばそうではありません。

地方創生の試みというのは、日本全国にありま
す1718市町村、そこにおいてどうやったら地域はサ
スティナブルであるか、持続可能性を維持できる
かということを、その地域、地域でお考えいただき、
それに対して国として、財政面、情報面、あるいは
人材面で支援をしていくというのが、今回の地方
創生の試みであります。

私が高校生のころ、昭和49年頃であります。田中角栄さんの「列島改造論」というのがありました。私が学校を出て勤め人の頃、大平正芳さんの「田園都市国家構想」というのがありました。これが昭和55年頃の話です。私がこの仕事に入った30年くらい前に竹下登さんの「ふるさと創生」というのがありました。それぞれの取り組みは、地域をどうするかという試みとして、それなりに大きな意義があったものと存じますが、今回の地方創生の取り組みのような、これに失敗すると国が潰れるという危機感はなかったと思っております。

この3つとも、経済がまだ成長していた時代、もしくはバブル経済の時代でありました。人口も増えていました。土地の値段も上がっていました。繰り返しますが、その前提が全て崩れた今どうするかということは、まず地域、地域でお考えをいただかねばならないことであります。そこにおいてサステイナビリティということを考えたときに、自然との共生というものをどう考えていくのか。今まで、ともしれば対立、つまり、人間の利益は自然系の不利益の

ようなところがないではなかった。コウノトリにしても、ツルにしても、いろいろな鳥は、それは綺麗だし、それなりに素晴らしいものだけれど、どちらかというところと農作物を食べて我々の生活にとって良くない存在ではないかという考え方もなかったわけではない。どうやってそれを対立の構造から共生の方向にもっていくかということは、地域、地域でいろいろなお知恵があり、いろいろな取り組みがあり、そういうようなお話が今日あろうかと思っております。

私が敬愛している方の一人に、藻谷浩介さんという方がいます。「里山資本主義」という本をお読みになった方も多かろうかと存じます。この本は主に、中国山地の中山間地域の、持続可能性がないと言われていた場所に題材を得ており、本当に詳細な取材に基づいて書かれた、素晴らしい本だと私は思っております。

人間の幸せとは何だろうか、サステナブルというのはどういうことなのだろうか、それはそういった地域にこそあるのではないか。里山資本主義というのは、あまり人口に膾炙しにくいのかもしませんが、まさしく里山こそが資本ではないか。今さえよければいいとか、自分だけ儲ければいいとか、そういう考えを株主資本主義とか金融資本主義とか申しますが、本質はゼロサムゲームで、誰かが得をして、後の人はみな損をするというのが金融資本主義であって、決してサステナブルではありません。里山にこそ、地域にこそ、そういうものがあるのであって、そういうのをサブシステムとして、この国は内蔵していかないと将来はないというような論旨ではなかったかと私は記憶をいたしているところでございます。

岡山県に真庭市というところがあって、ペレットストーブとかバイオマスとか、そういうことで全国の注目を集めているところですが、その例にみられるように、その地域が地域の資源を最大限活用し全体としてどのようにしてまわしていくのかということが重要でございます。それはずっと時代を遡って、

江戸時代の暮らしへ戻れということではなくて、現代における持続可能性のある、そしてまた自然と共生できる、そういうような国家というものを我が国はつくっていかなければなりません。

少子化問題も、財政問題も、環境問題、エネルギー問題も、日本が課題先進国であるが故に、それを真っ先に解決することは、今の日本国に生きる我々が果たすべき、次の時代に対する、国際社会に対する責任である、私はかように思うところであります。

政府があまり偉そうなことを申し上げる立場にはございません。まさしく知恵は地域にある、私どもはそれに学び、いかにしてそれを国政に反映するか。地方が主役とかという言葉は、美辞麗句のように今まで語られてきましたが、まさしく今、地方が主役であり、それをどうやっていかし後世に伝え、世界に伝えるか。そういうような時代であると認識しています。有意義な会となりますことを心からお祈りして、ご挨拶いたします。

ありがとうございました。

ツルが選んだまち ～出水市の取組～

鹿児島県出水市 市長
渋谷俊彦氏

ご紹介いただきました鹿児島県出水市長の渋谷俊彦です。本日はこのような機会をいただきまして、大変光栄に存じます。トップバッターとして、「ツルが選んだまち ～出水市の取組～」について発表させていただきます。

先ほど、順天市のスケールの大きな取組のお話をうかがいました。出水市も順天市とは3年前からナベヅルを縁として姉妹都市盟約を締結させていただきました。先ほどの国際庭園博覧会の室内の方に、出水市の武家庭園も展示させていただきました。いろいろとご指導をいただいているところです。

出水市は、鹿児島県北西部の八代海に面しています(図-1)。面積約330平方km、人口約5万5千人のまちで、2006年(平成18年)3月13日、旧出

水市、旧高尾野町、旧野田町の1市2町が合併して、現在の出水市が誕生しました。来年3月には市政施行10周年を迎えることになります。

新制出水市の将来の都市像として、「人と自然が融和した にぎわいある元気都市 出水市」を掲げています。2011年3月11日に、九州新幹線が福岡博多まで全線開通し、博多まで3時間20分かかっていたのが1時間10分に短縮されました。南九州西回り自動車道等の高速交通網の整備も進んでいるところです。企業誘致および本市の特性を生かした産業や観光の振興による定住人口や交流人口増大等の地域の活性化を図りながら、市民参画と協働による安全・安心で、たくましく躍進する北薩の中核都市の創造を目指して、市政を進めています。



図-1



図-2

本市は、温暖な気候、広大で肥沃な平野、豊かな水と緑、海・山の自然環境に恵まれていて、毎年1万羽を超えるツルが飛来する世界的な越冬地として知られています(図-2)。「鹿児島県のツルおよびその渡来地」として、国の特別天然記念物に指定されています。ちなみに、今シーズンのナベヅル、マナヅル飛来数は、先日11月7日に実施しました地元の中学生による第1回ツル羽数調査で、14,086羽を記録しております。

また、出水市には上場遺跡など、先史時代から人々が生活していた多くの遺跡をはじめ、薩摩藩主島津氏発祥の地として、初代忠久公から5代貞久公の墓碑のある五廟社等の史跡があります。また、江戸時代、肥後藩との境になっていたため、要衝の地として薩摩藩最大の外城が置かれ、現在国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている出水麓武家屋敷群など、往時の面影が今も残る「ツルと歴史のまち」として、観光振興に力を入れています(図-3)。

さて、先ほど、特別講演をされました韓国・順天市さんとは、ツル保護を縁として、2012年(平成24年)11月に姉妹都市盟約を締結しました(図-4)。本市の大産業祭において順天市の特産品販売や、グローバルな視野を持った人材育成を目的に、両市の中高校生を派遣しあう青少年友好交流等

を行っています。昨年11月には、出水市に趙忠勳市長をお招きして、ツル博物館クレインパークにて記念のセレモニーを実施し、さらなる交流の拡充について確認しあったところです。また、今日ご出席の山口県周南市さんとはナベヅルを縁として、さらにタンチョウの北海道釧路市さんとそれぞれ友好都市を結んでおりまして、各種イベント等で特産品を販売したり、中学生を派遣するなど交流を深めています。

それでは、はじめにツルの渡来・保護状況について紹介いたします。まず、出水市におけるツルの渡来数です(図-5)。戦争直後の1947年度(昭和22年)には、275羽という記録が残されていて、戦後の一時期は250羽から300羽という時代もありま



図-4



図-3



図-5

した。その後、国から1952年(昭和27年)に特別天然記念物に指定され、地域の皆様や行政による保護活動が本格的に始まりました。そのこともありまして、1975年(昭和50年)頃から徐々に羽数が増えてきたところです。1992年度(平成4年度)に、初めて1万羽を記録しました。1997年度(平成9年度)からは、19シーズン連続して万羽ヅルを達成しています。

世界中には15種のヅルがいるといわれています。そのうち、出水平野では7種のヅルを記録しています。最も数が多いのはナベヅルで、毎年約1万羽以上、次いでマナヅルで約3千羽渡来しています(図-6)。そのほか少数ですが、クロヅル、カナダヅル、アネハヅル、ソデグロヅル、タンチョウが渡来することがあります。

皆さんから、よく「なぜ、出水にあれだけのヅルが来るのか?」という質問を受けます。会場にお越しの皆さんのなかにも、不思議に思っている方があろうかと思います。私自身、その理由について考えてみました。まずは気象条件がヅルの生息条件と合致しているのではないかと考えています。温度、湿度、雨量、風向きなどの自然条件が、出水平野の地形的なものも含めて合致していると考えています。同時に、国や県のお力添えにより保護区を設けていただいています。そして、安全なねぐ

らも地権者のご理解で確保されています。このほか稲刈りの後の二番穂などの餌も豊富にあること、そして何よりも地域住民の方々の世代を越えたツルとの共存・共生が図られてきたことなどが、ツルの増羽につながったものと考えています(図-7)。

昭和47年頃から農地の借り上げが始まりました、はじめの頃は5haほどでしたが、現在では、保護区の面積は104haとなっていて、180人ほどの地権者に農地の提供をご協力いただいています。また、借上料も地権者のご理解のもとに、何年も据置きしていただいています、大変ありがたく思っています。こうしたことでツルの安全が確保されると同時に、餌も確保されて増羽につながっているのではないかと考えています。



図-7



図-6



図-8

それでは、ツルを活用した取組についてご紹介します。まず、「ツルと歴史のまち」として知られている出水市には、マスコットキャラクターとして「つるのしん」がごぞいます(図-8)。20年ほど前に誕生しています。今年の成人式には「つるのしん」も参加し、めでたく成人を迎えました。これは、侍の姿をしているツルのマスコットで、いろいろなイベント等に参加するとともにフェイスブックからも情報発信を行っています。また、ツルに関連した事業としては、出水の特産品とまごころを「ツルの恩返し」としてお送りする「ツルの恩返し便」事業を行っています(図-9)。みかん、和菓子、鳥の製品、焼酎など、皆さんが真心込めて作ったものです。お申し込みいただきますと、届け先だけでなく送り主にも「ツルの里会員証」がもらえ、ツル観察センターやクレインパークいずみの無料入館やホテル、旅館および飲食店のサービスなどの特典があります。

さらに、ツルを縁としていろんなイベントを開催しております。まずは、「第28回出水ツルマラソン大会」です(図-10)。現在では、10月の第3日曜日に開催しています。かつては2月に行っていましたが、2012年(平成24年)度からは鳥インフルエンザの影響の少ない10月に開くようになりました。年々参加者も増えていまして、昨年度は過去最

高の3,155人、今年も3,105人の参加をいただいています。地元の特産品でおもてなしを行う前夜祭も開催し、参加者の皆さんと交流を深めています。マラソン大会には全国各地からランナーが参加され、とりわけ今年は台湾から10人の方が参加しました。このため、宿泊者も多く、市内のホテル等では対応できず、近隣市町にも宿泊してもらうほどでございます。コースは3つ、フルマラソン、10km、3kmになっています。

ツルを見ながらウォーキングをしようということで、毎年12月に「ツルのまちウォーキング大会」も実施しています(図-11)。コースは約13kmで250人から300人ほどの方々にご参加いただいています。これは、高尾野の河川敷を利用した周回コ



図-10



図-9



図-11

ースで行われます「たかおの鶴駅伝大会」です。中学生、高校生などがそれぞれ競争しています。

このように、ツルを銘打っていろいろなイベントを計画し、地域の活性化に努めています。写真は、今年3月の第51回目の「ツルを送る夕べ」の開会式の模様です(図-12)。ツルは、2月から3月にかけてそれぞれ繁殖地に帰っていきます。その道中が無事でありますようにと祈りを込めて、職場・団体対抗によります「ツルを送る夕べ」という歌謡大会を開いていまして、大変にぎやかに開催されています。

次は「ツル米」検討会です(図-13)。以前は、ツルの渡来地である荒崎地域で生産される米を「ツル米」として、ツル観察センターの売店等で販売

していましたが、現在は行っていないようです。しかし、本年度、東干拓において「なつほのか」という新品種の米の栽培がされています。食味もよく収量も良いとの評判です。ツルの渡来地で作られた縁起の良い米として今後、農家の方々と協力を行い出水の特産品として活用できないか検討を続けていて、来年からは、販売も計画されているようです。

また、郷土のシンボルであるツルについて詳しく知ってもらい、郷土を育てるとともに地域・社会に貢献できる人材の育成を目指して、2010年(平成22年)度から、「いずみツルガイド博士」検定試験を実施しています。市内の小・中学生を対象に、ツルの生態や保護活動などに関する知識を問う筆記試験およびその魅力を発信する力を試す実技試験を実施し、ツルガイド博士として認定します。過去5年間の受験者数は、5,546人に上り、現在62人のツルガイド博士が誕生しています。博士たちはボランティアガイドとして、ツルの魅力・出水のすばらしさを観光客などに伝える活動を行っています(図-14)。これが広く行き渡りますと、子どもたちがツルに対しての理解が深まり、あるいはツルとの共存・共生していく意識がさらに高まっていくのではないかと考えているところでございます。観光客にもツルガイドの話は、大変好評です。



図-12



図-13



図-14

ツルとは直接関係はありませんが、今年初めての事業として、竹灯籠でつなぐ光の祭典「いずみマチ・テラス」を国民文化祭の一環として、10月30日から11月1日まで3日間実施いたしました。出水市の人口と同じ55,000本の竹灯籠を地元の青年たちが作製し、その光でまちを照らし、情緒あふれるまちづくりを行うことにより、交流人口の増大を図り、まちの活性化につなげようという趣旨です(図-15)。

今後につきましても、このような事業を継続し、「歩いて」、「見て」、「体験できる」観光の確立を行ってまいりたいと考えています。最後に、毎年1万羽以上のツルが選んだまちとして、ツルとの共存・共生を図りながら、ツルを活用した地方創生について、より一層取り組んでまいりたいとの決意を申し上げまして、出水市の取組の紹介を終わらせていただきます。

ご清聴、誠にありがとうございました。



図-15

周南のナベツル ツルと「共に」生きる里の挑戦

山口県周南市 市長
木村健一郎氏

本日は大変貴重な機会を与えていただきましてありがとうございます。周南市長の木村健一郎です。よろしくお願いいたします。先にお話しいただいた韓国順天市、出水市さんと比べますと、渡来するツルの数は少ないですが、本市にも毎年ツルがやって来ます。今日は、「ツルと共に生きる里の挑戦」と題して、周南市の取り組みを紹介させていただきます。

さて、最初に周南市の概要をお話します。地図で示しております山口県の東部に位置する周南市は、平成15年に、徳山、新南陽、熊毛、鹿野という2市2町が合併してできました(図-1)。人口約14万8千人、面積は東京23区、シンガポール、琵琶湖とほぼ同じ程度の約656平方kmのまちであります。



図-1

臨海部には、製造品出荷額1兆3千億円を誇る、石油化学コンビナート群を中心とした工業地帯が広がっています。このコンビナート夜景は、日本六大工場夜景にも数えられています。今の時期から年明けにかけては、本市の中心部では、ツリー祭も行われまして、工場夜景と合わせ、光り輝く街並みを堪能していただけます。周南市の玄関口、徳山駅に、先日エヴァンゲリオン新幹線がお目見えしました。実はエヴァンゲリオンで有名な漫画家、アニメーターの貞本義行さんは、周南市の出身であります。現在、新しい駅ビルの建設が、平成30年のオープンに向けて、新たな賑わいづくりの拠点として進められているところです。平成25年9月、本市の徳山動物園にスリランカ国との国交樹立60周年を記念して、2頭の象がやってきました。周南市は、童謡「ぞうさん」の作者まど・みちおさんの出身地であることから、動物園にゾウは欠かせません。

また、本市の先進的な取り組みとして、コンビナートで発生した水素を活用した「水素先進都市周南」を推進しています。水素の国内有数の生産地として様々な取り組みを行っています。たとえば、ロケットの燃料となる液化水素は、本市でつくられています。本年8月には、中四国エリア初となる液化水素ステーションもオープンしました(図-2)。左側が私、私の右隣にいらっしゃるの、村岡嗣政山口県知事です。周南市では、公用車に燃料電

池自動車を導入しました。現在、民間も含めて10台程度の燃料電池自動車が市内を走っております。南は瀬戸内海、北部には中国山地。四季折々に表情を変える中山間部があります。冬の使者ナベヅルも中山間地域の一員です。

さて、本日お話しさせていただくツルの里、八代地区は、本市中心部から北東約20kmに位置する中山間地域で、人口は351世帯、737人。三方を山に囲まれた標高約320mの盆地です。地区全域が「八代のツルおよびその渡来地」として、昭和30年に国の特別天然記念物指定を受けていて、ここでツルと人が共に生活をしています(図-3)。

ツル保護の歴史を振り返ってみますと、明治維新以降、全国各地でツルが捕獲されるなか、八代

地区では村人が申し合せ、捕獲を禁じ、ツルを守り続けました。地区内には村人が死んだツルの墓があります。明治20年に、他の村からやってきた猟師がツルを鉄砲で打つという事件に端を発し、村人の請願により、県の条例によってツルの捕獲が禁止されました。このことから、周南市八代地区は、近代日本の自然保護制度発祥の地と言われています。明治以降、ツルのために落ち穂を拾わずに残す、米の作付けや収穫を早くする、冬場はなるべく田に入らないといった、ツルと共生する独自の文化が形成されました。しかしながら、昭和15年の355羽をピークに、近年渡来するツルの数が年々減少しておりまして、昨年度は11羽のナベヅルの渡来という状況になっています(図-4)。

本市では、文化庁や山口県からの協力を得ながら、ツルの越冬地を守るための保護の取り組みを行っています。主な取り組みとしては、ネグラ等の環境整備、デコイの設置、保護ツルの移送および放鳥の3つです(図-5)。本市では、ツルの越冬環境として重要なネグラと餌場の維持および改善に努めています。写真は休耕田を活用した田ネグラの状況です。ネグラにはこのほか、はげ山を整備した山ネグラ、ため池を利用したため池ネグラがあり、毎年、合計11カ所の維持管理に努めてい



図-2



図-3

ツル保護の歴史

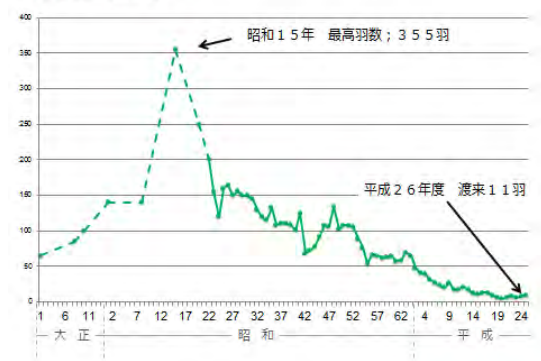


図-4

ます。ツルは、山あいの、水が豊富で凍らない田ネグラを主に利用しています。田ネグラは、現在、ほぼ市が買い上げ、耕し、水を張るとともに、周囲の雑木の伐採を行うなど、ツルが降りやすいように整備しています。こうしたネグラでは、大きな機械が入らない場所もあり、手作業も多くなることから、地域住民はもとより、全国より集まったボランティアと一体となって整備に取り組んでいます。

次に、餌場整備です。ツルの餌となる、米の作付や、ドジョウや水生昆虫を確保するためのビオトープを整備しています(図-6)。ツルの餌場は、市で管理するもののほか、地域の方にツルの渡来期間に田んぼを提供してもらい、5カ所程度を整備し活用しています。餌場は、ツルが日中の大半を過

ごすことから、ネグラ同様の維持管理を行っています。年間を通して環境整備の作業をしていますが、ツルが渡来する前には地元保護団体の主催で一斉整備を行っています(図-7)。今年は、10月3日に行われ、県内外からボランティアや小学校の児童など、約200人が参加し、ツルを受け入れるため汗を流していただきました。また、ボランティア以外にも、多くの企業や個人の方から、本市や地元のツル保護団体に寄付をいただき、環境整備に役立っているところです。

次に、デコイの設置についてです。デコイは、もともと猟で使われるおとりのことですが、本市では、平成10年から、上空を飛ぶツルの誘因と、ツルの引き止めの2つの目的で設置しています。製作は、現代の名工に認定されている内山春雄さんによるものです。現在、30体ございまして、地区内5カ所に分散して配置しています。このナベヅルのデコイは、このとおり非常にリアルに作られていて、ツルを見学に来られた方が本物と見間違えるほどであります。写真は実際の設置状況ですが、このなかには本物のツルが2羽います(図-8)。どれか分かりますでしょうか?デコイの設置は、とくに、引き止め効果の面で大きな成果を上げています。近年の渡来数減少の原因のひとつに、ツル同士の縄張り争いによる飛び去りが挙げられます。このため、平成2

ツルの里の再生に向けて・・・
～周南市のツル保護の取り組み～



図-5

環境整備の取り組み・・・
餌場整備



図-6

環境整備の取り組み・・・
地域一体となった整備



図-7

2年度から、八代への引き止めを目指し、デコイの設置方法を変更しました。この結果、縄張り争いに負けても八代に留まるツルが増え、昨年度は9年ぶりに2ケタ、11羽の渡来数を記録しております(図-9)。

3つ目の取り組みとして、出水市さんのご協力のもと、平成18年より行っております保護ツルの移送および放鳥について紹介いたします。この事業は、渡来数回復のため、出水市さんで保護されたナベヅルを八代に移送し、一定期間飼育した後、放鳥するものです。これは世界初の試みとして行われまして、平成19年3月以降、これまでに15羽のナベヅルを放鳥しています。

本市では、ツルの治療の拠点施設として管理

デコイの設置



図-8

デコイの設置による取組



図-9

棟と4つの飼育ケージを有するツル保護センターを整備しています(図-10)。保護ツルの受け入れ、飼育および放鳥はここで行われます。放鳥は、ツルの羽の状態や体調などを考慮するとともに、過度の負担を与えない方法で行っています。今のところ放鳥した一部のツルは八代に戻らず出水市で確認されていますが、いずれは八代に戻ってきてツルの渡来数回復に繋がるものと期待をしています。

さて、ここまでは八代のツル保護の歴史や環境の整備についてご紹介しましたが、もうひとつ、重要なこととして、地域の振興に向けたツルの保護と農業の関係をお話しなくてはなりません。これまでお話したとおり、ツルが日中使う場所は水田ですので、稲作を中心とした地域の農業を守ることがツルの越冬環境を守ることにつながります。しかしながら、八代地区も他の中山間地域と同様に高齢化が進んでいて、農家の後継者不足から、農地の荒廃が心配されていました。こうした現状を踏まえ、平成4年度から、県営事業としてはほ場整備を行い、農地の保全に取り組んできました。左側の写真は、ほ場整備前、右側は、ほ場整備後の様子です(図-11)。水田面積が大きくなったことから、大型の機械が導入できるなど耕作の省力化が図られるようになりました。

保護ツルの移送・放鳥・・・ 周南市八代ツル保護センター



図-10

このほ場整備の工事では、ツルの生態に最大限配慮しながら作業を行いました。たとえば、餌場付近の水路では、コンクリート水路でなく、ツルの餌となる水生昆虫やドジョウなどの生物に配慮した多自然型工法を用いた水路を導入しました(図-12)。そのほか、ツルに影響のない工期設定や、ツルの歩きやすい法面傾斜の採用などがなされました。ほ場整備後には、農業を支えるための担い手の育成や、ツルにやさしい農業を目指す、農事組合法人ファームツルの里が設立されました。また、農業を引き継ぐために八代に帰ってきた娘さんもいますし、遠くは神奈川県から八代の農業を支えるためにやってきた若者もいて、心配されていた農業の後継者不足も徐々に解消に向かってい

ます。また、農業の基盤整備が整ったことで、ツルの生息環境を保全するための農法の検討も行われました。平成18年に、農業団体やツル保護団体によって八代地区自然再生協議会が結成され、兵庫県豊岡市さんで行われているコウノトリ育む農法を参考に、冬期湛水栽培が導入されました。現在一部の水田で無農薬・無化学肥料による作付も行われています。

こうした取り組みにより米の価値を高めることで、たとえば、農事組合法人の作るブランド米「つるの里米」は高値で販売されています(図-13)。八代産酒米を使用した「かほり鶴」というお酒もあります。このお酒は、イギリスで開催されたインターナショナル・ワイン・チャレンジ2014のサケ部門で銀メダ

ツルの保護と農業
八代地区のほ場整備



図-11

ツルの保護と農業
高付加価値な農産品



図-13

ツルの保護と農業
ツルに配慮したほ場整備



図-12

周南のナベヅルを生かした環境教育
周南市立八代小学校の取り組み



図-14

ルを受賞しました。このように、ツルと共生するコメづくりは高い評価を受け、地域の活性化にもつながっています。

紹介したような、ツルと共に歩む農業によって守られてきた豊かな自然環境は、ツルを題材として地区内外の子どもたちが、環境を学ぶ重要な場として活用されています(図-14)。たとえば、地区内の八代小学校では、地域と連携をしながら、ツルの保全活動に関わっており、デコイの設置を行ったり、ツルの観察を新聞にまとめた「つる日記」の発行など、ユニークな活動を行っています。今年度の八代小学校の児童数は全部で15人だったと思います。こうした活動が評価され、平成24年には、内閣府の社会貢献青少年表彰を受賞しています。八代では、ツルの生息環境調査を行う「ツルの里生きもの研究会」というグループもできました。この研究会が主催し、市内の子どもたちと一緒に生きもの調査を実施するイベントも行われています。周南市の全域から多くの子どもたちが集まっています。こうした取り組みを通して、ツルの保護の様子や、八代地区のことを学んでもらえるとともに、地域の賑わいにも繋がっています。

最後に、ツルと『共に』歩む里の未来に向けた取組について紹介いたします。八代地区では、平成23年度に、地域住民の手により「八代地区夢プ

ラン」が作成され、地域をあげて活性化に取り組んでいます(図-15)。この夢プラン実現のために、ツル見学に来られた方に対して地域の農産品を販売したり、また、地域を活性化しようという試みを、地域コミュニティが中心となって取り組み始めています。

また、八代の生きものを見るだけでなく、その生きものを育む農業について勉強し、さらに八代で収穫された作物を実際に食べてみるという試みが、八代の若手農家と先ほど紹介した「ツルの里生きもの研究会」とのコラボレーションで、今年スタートしました。

こうした取り組みを進めることにより、一旦は衰退してしまった中山間地域のきずなやつながりがより深まることで、地域経済も徐々に活性化しつつあります(図-16)。ツルと共に生きる八代の里の取り組み、これは極めて小さな挑戦ではありますが、環境の時代にふさわしい地域創生のひとつのあり方であると考えております。

ご清聴ありがとうございました。

ツルと「共に」歩む里の未来に向けた取り組み



図-15

ツルと「共に」歩む里の未来に向けた取り組み



図-16

離島佐渡の挑戦

歴史と文化が薫り 自然と人が共生できる美しい島

新潟県佐渡市 市長

甲斐元也氏

佐渡市長の甲斐元也でございます。今日は、このすばらしい大会に参加ができましたこと、また発表の機会をいただきましたことに対し、心から感謝を申し上げます。折角の機会にもかかわらず、風邪をひきまして、お聞き苦しいかもしれませんが、しばしの間おつきあいを賜りたいと思います。

本日、私から皆様にご報告させていただきたいのは、「離島佐渡の挑戦」、佐渡市の地方創生の取組についてです。先ほど、石破大臣からもお話がありましたが、地方創生と地域の関わりということについて、佐渡はトキが中心ですが、それ以外に文化・歴史があるわけです。それをどう地方創生のなかで生かしていくかということについて、発表をさせていただきます。

まず、佐渡市の実態をご紹介させていただきます



図-1

す。今日発表する市のなかで、離島というのは私も佐渡だけでございます。佐渡は日本海の中央に位置しています。離島と言いますと、島ですから非常に小さいと思われるかもしれませんが、沖縄本島に次いで日本で2番目に大きな島で、面積は855平方km、東京23区の約1.4倍です(図-1)。そして周囲は280kmあります。したがって、海から陸に上がったときは島だということになるわけですが、一旦なかに足を入れていただきますと大陸のような感じです。この大きな島のなかに人口約5万8千人が住んでいます。したがって、人間よりも植物や動物が住みやすい島ということになるわけでございます。

地方創生のなかで話題になっていることは人口問題であります。ややもするとこの地方創生というのは、都会から地方、とくに佐渡に人を呼び寄せる、定住人口を拡大するのだというふうに一概に捉えられているわけですが、私は今回のこの地方創生というものは、それだけではないと考えております。これが佐渡の人口の実態であります(図-2)。佐渡の人口は、1950年(昭和25年)頃の12万5千人をピークに年々千人ずつ減少し続けています。とくに1950年から1965年くらいの期間に人口が急激に減りました。つまり、この間に、高度経済成長に伴う若者、つまり金の卵の都会への流出による「人口の空白」が起きたわけです。また、それに続いて労働力の減少に伴う耕作放棄地の増加による「土

地の空白」が増えてまいりました。そして、次に高齢化に伴う限界集落の増加による「村の空白」が起きました。

実は、ここまではなんとか我慢ができたわけです。というのは日本の人口が増えていたからです。日本の人口が増加し、経済が成長していた時代は、大きな問題にはなりません。しかし、平成20年から日本の人口が全体として減少しはじめました。この人口問題が出たことで、さて困ったという状況になったと私は捉えております。そこで、我々が考えていかなければならないのが、「人口の空白」ができ、「土地の空白」ができ、「村の空白」というものができた。これは仕方がないことだ。しかし、そこに住んでいる人たちに、「誇りの空白」ができてしまったら、地方は終わりだろうと私は思っております。したがって、地方創生の原点は、「誇りの空白」をなくすということであると考えます。

もう1点、地方創生の原点として考えられるのは、いわゆる三種の神器、テレビ、洗濯機、冷蔵庫に代表される「物の文化」。物を持つことによって、人間の豊かさが追求された時代。もうこれらの品物は、市場で飽和状態になっているわけであります。そのなかにおいて、「本当の幸せとは一体何か」をもう一回考え直すことが、地方創生の原点ではないかと考えています。物の豊かさから本当の豊か

さ、それは自然と人、歴史・文化と人が共生する、そのなかで我々が生きていくことが本当の地方創生ではないか。この2つを目指して、我々は今進めているところでございます。

次に、佐渡では毎年千人ずつの人口が減っているなか、地方創生の佐渡版というものを7月末に作り上げました。国立社会保障・人口問題研究所の報告によりますと、2060年の佐渡市の人口は、約2万5千人と推計されています。2万5千人には絶対にしてならない。佐渡市の人口減少の大きな要因は、島外流出による若年層の減少と、それに伴う出生数の減少であり、短期的な取組で自然減を含めた人口減少を止めることは不可能ですが、若年層の流出を中心とする社会減を何とか抑制することが極めて重要となります。

ちなみに佐渡では、1年間に1,100人の方がお亡くなりになっています。一方、生まれてくる赤ちゃんは380人であります。したがって、人口減少を防ぐことは現段階においては不可能なわけです。外から入ってくる人と佐渡から出て行く人の差を少しずつ小さくしながら、社会減を5年毎に50%縮減していく。国の長期ビジョンからも、人口減少を増加に転じさせることはもとより、歯止めをかけることすら極めて困難な課題であります。しかし、本年7月に策定した佐渡市人口ビジョンにおいて、合計特殊出生率を2.08、社会減を5年毎に50%縮小させて、2060年に人口3万7千人程度を確保するという目標を掲げました。その実現のために経済活動、社会活動というものをどう構築していくのか。それが佐渡市における地方創生の原点であり、そこで策定したのが「佐渡市まち・ひと・しごと創生総合戦略」です。

総合戦略の基本コンセプトを、「歴史と文化が薫り 自然と人が共生できる美しい島」として、人口減少を抑制し、バランスのとれた社会形成を目指して、佐渡ならではの大胆な施策の展開により、市民とともに全力を挙げて取り組んでいきます

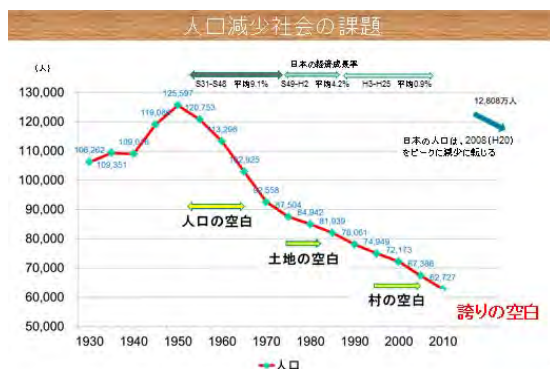


図-2

(図-3)。総合戦略では、①島の資源を活かし、元気な産業と安定した雇用を創出する、②世界的3資産を中心とした島の魅力とおもてなしの心で観光・交流を促進する、③生活しやすい環境を整え、若者の出会いから就業までを島全体で応援する、④特色ある持続可能な地域をつくり、島の安全・安心を確保する、の4つの基本目標を掲げています。その基本には、ないものを探すことはもう止めよう、あるものの付加価値をどう付けていくのか、これを島民全体で考えていくということをコンセプトに今進めているところです。

人口減少を克服し、佐渡の地方創生を実現するための基本的な考え方として、長期的には「佐渡の将来を担う若者を中心とする人材の育成・確保」があります。今、佐渡には5つの県立高校があります。しかし、子どもの数がどんどん減って、学級減というかたちになっています。これは仕方ない。しかし、佐渡の子どもたちが少なくなるならば、よそから呼べばよいではないか。今、このための高等学校改革を、新潟県のモデルとして、知事と相談しながら進めているところです。

一番の問題は、いろいろな高校があったわけですが、それがほとんど普通科の高校としたところに問題があります。これを何とか元に戻せないかと思っています。たとえば、佐渡には能という文化や鬼

太鼓という文化がある。こういうものを生かして、高等学校教育に芸能という科が作れないか、こういうことも考えながら、「一次産業の振興と観光振興を中心とした若者の雇用の受皿づくり」と「子育て環境の整備」を推進していくことにしています。佐渡の地方創生のねらいは、島民一体となって、精神的にも経済的にも、「依存」をするのではなく「自立」するということに主眼を置いています。そうしたことをいろいろな会議の場で島民の方々と話し合っています。

佐渡と言えばトキということになります。トキと暮らす島について、本日のテーマである「自然と共存する持続可能な自治体づくり」の報告をいたします。

2012年6月に、「生物多様性が育む佐渡の豊かな自然と暮らしの保全・再生」を基本理念とした「生物多様性 佐渡戦略」を策定しました。この戦略の期間は90年間です(図-4)。2100年を目標に掲げています。90年は、1世代を30年と考えた場合の3世代分に相当します。つまり、本戦略の運用は、現在佐渡で生活している人に加え、今生まれつつある子どもたちとその孫の代に至るまでの約束を意味します。

キーワードは、「知る・守る・使う」です。この3つが「生物多様性 佐渡戦略」の3つの柱です。人と



図-3



図-4

多くの生きものが共生する環境は、長きにわたり
 培われてきた豊かな自然、歴史、文化について、
 市民一人ひとりがまず知ろうではないか、次にそ
 れを守っていこうではないか、そして、最後にもうひ
 とつ、それを使っていこうではないかということです。
 「知る・守る・使う」をキャッチフレーズとして、保
 全・再生を進めるというものです。

まず、「佐渡の生物多様性豊かな環境を市民
 一人ひとりが理解する」。そのために知ること
 が大事であります(図-5)。具体的な取組としては、
 「佐渡kids生きもの調査隊の活動」など、生物多
 様性に対する市民理解の促進があります。そのこ
 とで、佐渡にはどういう自然があるのかを、改めて
 子どもも大人もみんなで確認をし合おうというこ
 とです。それから、企業の方々にも知っていただこう
 ということで、「企業CSR活動の参画促進」というこ
 とも進めています。また、これからの人材となる大
 学生の活躍にも期待しようということで、「大学等
 との連携による人材育成の促進」も行っています。
 今、佐渡には専門学校が3校あるだけで、大学が
 ありません。これは本土の大学との連携です。現在
 33の大学と連携をとって、佐渡に来ていただい
 ています。佐渡で1年間勉強するということで単位が
 もらえるという制度もつくりました。

次に、「佐渡を守る」ですが、佐渡の様々な自然

資源を知った上で、今度はそれを守っていこうとい
 うことです(図-6)。「生物多様性の損失を食い止
 め、佐渡の本来の生態系を回復する」。このための
 具体的な取組としては、「在来種の保全・保護」、
 「生態系に悪影響を及ぼす生物への対応強化」、
 さらには「多様な生物が生息・生育できる環境の
 保全・再生」があります。佐渡の固有種として、サド
 マイマイ、サドノウサギ、サドガエルなどがいますが、
 こういふ野生の生きものをみんなの手で守っていこ
 うというのが、「守る」の取組です。

最後に、「佐渡を使う」です。これは「生物多様
 性の恵みを持続的に享受する地域社会を構築す
 る」ことです。自然や文化・伝統を守っていくこと
 は必要ですが、そのときに「環境と経済が好循環す
 る産業の育成」が絶対に必要です。トキをどんなに
 守ろうとも、佐渡に住んでいる人たちがだんだん落
 ちぶれていっては困るわけです。トキと共存する、
 つまり、経済が伴っていなければなりません。また
 「環境負荷の少ない循環型社会づくりの促進」も
 必要です。

地域の良さや価値を、そこに住む住民が知るこ
 とが活性化の原点であり、さらには、それらを発信
 していくことが重要であると考えています。この「知
 る・守る・使う」は、生物多様性の世界だけではなく、
 全ての政策の基本であり、佐渡の地方創生の



図-5



図-6

取組もこれに基づいています。

佐渡として特徴的なものは、やはりトキであります。トキは元々日本全国にいた鳥ですが、ゼロ羽になりました。中国からつがいのトキをお借りして繁殖させた結果、今300羽が佐渡にいます。そのトキのうちの約150羽が佐渡の空を飛んでいます。観光客の方々が佐渡に来られて、飛んでいるトキを見たいという希望が多いわけです。しかし、なかなか見られません。サギも多くなりますので、トキを見に行っただけけれど、どうもサギではないかということを言われます。855平方kmの広い土地では、150羽飛んでいても、それほど頻繁に見られるものではないわけです。観光客の方々には、常々、日頃の行いのよい方は、必ず会うことができますと申し上げておりますが、ほとんどの方が日頃の行いが悪いのか会えないようです。というようなことから、トキをもっと増やしていかなければならないと思っています。このことから、ただ今、トキを中心として生物多様性の保全を進めています。

トキは、元々は日本全国にいた鳥であります。鳥追い歌というのをご存じかと思います。この鳥追い歌は害鳥を駆除するためのものですが、この歌の鳥はトキだったのです。過去、日本全国にトキはいた。それが全くゼロになったということでもあります。明治時代になって、美しい羽をねらった狩猟が盛

んになり、乱獲されてしまいます。その後、日本では工業化が進み、田んぼが減ったり、自然破壊や環境汚染もあってどんどん数が減りました。佐渡はトキが最後に残った地ですから、1羽でも2羽でも増やしていこう、そして、トキとともに住める島を目指そうということで始めた野生復帰の取組です。1998年、日中友好の証として中国政府から2羽のトキが贈られました。佐渡トキ保護センターで、このつがいから1999年に最初のトキが孵化し、その後、毎年雛が孵っています。

佐渡ではこのトキの保護に長年取り組んでいますが、トキの餌場には、生物多様性豊かな環境が必要でした。経済性を重視し、近代的な田んぼの整備を進めてきた佐渡には、新たな農業の仕組みが必要となりました(図-7)。佐渡市では、トキの野生復帰を目指して、農家の方々と共に、餌場環境の再生など様々な取組を進めてきました。トキが餌をついばめる場所として、転作制度を始めました。トキのくちばしは先の方にはセンサーが付いています。土の中にいるものを、そのセンサーを使って捕獲します。したがって、平らなところにドジョウやタニシを置いてもなかなか食べてくれません。田んぼの土壌の中にそうした生物がいなければ、トキは餌が食べられず生きていけません。圃場に餌をまいてもトキは生活できないのです。近代化が進む田んぼで、豊かな生態系を再生する新たなチャレンジとして始めたのが、「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」です。これは田んぼに棲む小さな命を再生し、生きものを育む特別な農法を農家自らが取り組み、それを佐渡市が認証する仕組みで、2008年から開始しています。

そして「使う」ということですが、佐渡はトキ様々ですが、このトキを活用して、「朱鷺と暮らす郷」のお米を作らせていただきました(図-8)。「朱鷺と暮らす郷」のお米は、農薬と化学肥料の使用を50%以下としています。これはなかなか難しい栽培方法です。また、魚道の設置や冬期湛水もやって



図-7

います。残念ながら分ったことは、今の方法による冬期湛水ですと食味が落ちるということでした。これを改善する方法の開発に取り組んでいるところです。現在水稲作付面積の23%まで拡大しました。これを通じて都市との交流を行っています。「朱鷺と暮らす郷認証制度」で認証された米は、首都圏の米穀専門店を中心に確実にその販路を広げており、現在では500店舗を超えています。この制度がきっかけとなり、食糧生産だけではなく、田んぼの役割を消費者と農家が共有したことで、今では、様々な主体によって佐渡の生物多様性豊かな里山を支える活動が広がっています。

子どもたち、消費者、企業など、様々な主体による農業を通した生物多様性保全活動により、人とトキが共生する佐渡の里山が守られています。生きもの調査やビオトープづくりをはじめとする農業体験、大学等との連携、企業の社会貢献活動など、たくさんの方々に応援していただいています（図-9）。このスライドの左下は棚田の写真です。それぞれの田んぼの面積が小さく、機械が入ることができませんので人間の手でやっております。こういうかたちで皆さんにお手伝いいただきながら環境を守っています。

このようななか、伝統的な里山で引き継がれてきた豊かな生態系と近代化農業に対応した「生

き物を育む農法」の取組により、2011年6月に先進国および日本で初めて、石川県能登地域とともに世界農業遺産(GIAHS)に認定されました。このジアスに認定された理由としては、①農業生産システムに「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」を導入し、消費者と連携しながら島全体へ拡げていること、②生物多様性保全型農業と農業経済が連携し、持続的な環境保全体制を構築していること、③佐渡金山が風景と文化に大きな影響を与え、生物多様性と農業生産活動を育むことによって、農村コミュニティを保全してきたこと、が挙げられます。このことは、トキと共生する佐渡の里山が国際的な評価をいただいたと同時に、これからの時代の変化にも適応しながら、この里山を未来に引き継いでいくことを国際的に約束したことであります。

地方創生を進めていく上においては、トキに代表される自然だけではなく、佐渡にある歴史・文化と一体的に進めていく必要があります。まず、知るという点では、今ご説明しました世界農業遺産(ジアス)の認定があります。佐渡金銀山については、なんとしても平成30年には世界文化遺産登録をしたいと思っています。また、世界ジオパークがあるような豊かな大地もあります。そして、伝統文化としての鬼太鼓がある。カンゾウが咲き、コブ

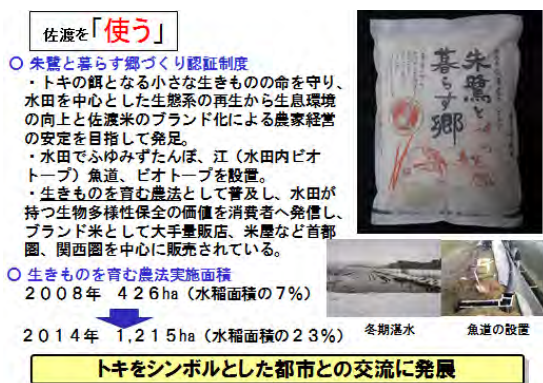


図-8



図-9

ダイが泳ぐ、さらには洞爺湖サミット会場に展示された杉の巨木群といった豊かな自然、こういうものが佐渡には現在も残されています。このことを、まず島民から知っていただかなければなりません。

これがジオパークです(図-10)。海底の隆起により約300万年前に誕生した佐渡の自然は、島全体をそのまま展示物に見立てた大地のテーマパークです。約3億年前の地層や様々な海岸地形が観察できる佐渡は、2013年9月に、「日本ジオパーク」に認定されました。現在、世界ジオパークの認定を目指しています。このように、いろいろな財産があります。しかし、これを使い切れていないというのが課題であります。佐渡にある自然、歴史、文化、芸能を物語として、どう活用していくのかということが、これから一番大切なことだと考えています。佐渡には金銀山もあります。約3000万年前から1700万年前の火山活動により、金銀の鉱脈が形成されたと言われています。これは道遊の割戸といわれているもので、山の上の方から掘って行って、今の形になったということです(図-11)。

江戸幕府の財政を支えたのが、実は佐渡の金銀山です。金銀山開発は、16世紀なかばから本格化しました。江戸時代には日本最大の金銀山として世界有数の産出量を誇り、300年にわたって幕府の財政を支えることになりました。島に住む

人々の生活にも大きな影響を及ぼしました。この金銀山の発展により、全国各地から富を求めた労働者や商人が多数押し寄せ、またたく間に国内有数の大都市に成長し、最盛期には、約5万人もの人が暮らした鉱山都市・相川が誕生しました。その後、鎖国から開国に移るときの金本位制、これにも佐渡金銀山が大きく影響したと考えられています。東インド会社の方に佐渡小判が流れていったという経緯から、今インドの方々と交流を深めています。

金銀山と関連した物語という中で、棚田というものがあるわけであります。日本全国に棚田はありますが、佐渡の棚田にはひとつの歴史があります。江戸時代における金山の発展に伴う人口の急増



図-11



島全体が自然をそのまま展示物にみたてた大地のテーマパーク

図-10



図-12

により、食糧の増産をする必要がありました。このことにより新田開発が進み、山間深くまで耕す棚田や、隆起を繰り返して形成された海岸段丘の上に続く、佐渡の独特な棚田景観を作りあげました(図-12)。棚田で一番大事なのが水田の水の確保です。他方、金銀山開発で問題なのが、山から出てくる水の処理でした。アルキメデスの水中の水換えの機械を使って、この棚田ができあがったという歴史でございます。佐渡にはこういう「物語」があります。これを組み立てていくということでありす。

これは薪能の能舞台であります(図-13)。世界無形文化遺産でもある能は、江戸時代は武士階級のものと言われていました。その江戸時代にあって、佐渡の能は農民や商人などの庶民が支えていました。国内には多くの能舞台がありますが、そのうちの3分の1が佐渡にあります。島国であるが故に、金銀山の隆盛が、今だかつて佐渡に残っています。島内各地に残る能舞台の多さからも、佐渡の能が地域に根付いていることがうかがえます。現在佐渡には36棟の独立した能舞台があります。8棟が新潟県の有形民俗文化財に、10棟が佐渡市の有形文化財に指定されています。今でもいくつかの能舞台で演能が行われていますが、多くの演じ手は能の専門家ではありません。農家の方々

や子どもたちが披露しています。農家の方々は農業や家業のかたわら芸を磨いています。まさに佐渡の人と風土が守り育て続けてきた芸能と言えます。

さらに注目をする必要があるのが佐渡の芸能です。この芸能も金銀山から発したものであります。鬼太鼓は、その振付けに能の影響が多く見られると言われています(図-14)。鬼太鼓は、集落の祭などで演じられ、魔を払ったり、五穀豊穡・家内安全を祈願したりと、大切な役割を担っています。現在、島全体で100を超える保存会によって受け継がれています。後継者不足の解消が課題となっていたところ、33の大学と連携を取ることで、それをカバーしています。学生が1週間から10日佐渡に滞在し、鬼太鼓の練習をして、実際の祭でも学生が踊ってくれるという状況になっています。幸いなことに、鬼は面を被っていますので、踊っているのが学生であるかどうか分からないという利点があります。

さて、「使う」ということですが、佐渡には、金山で栄えた往時をしのばせる街並みが、いたるところにあります。北前船の関係で、舟形をした住宅があるわけです(図-15)。こうした伝統家屋が現在も残っています。ここを観光客の方々に歩いて観ていただこうと思っています。またこれは京町通りです。



図-13



図-14

金銀山の採掘が盛んな頃には、大工町やいろいろな町ができました。京町は京都からの文化が流れてきてできました。こうした佐渡で育まれた歴史というものを、観光客の皆様にご覧いただくということを進めているところです。

高付加価値化の取組ですが、佐渡の棚田地域の米作りは300年の歴史があります。5つの棚田を使って棚田米を作っています(図-16)。今なお昔ながらの農法が受け継がれおり、棚田米としてブランド化されています。それぞれの棚田が工夫して作ったものを各棚田米として出荷しています。

佐渡の里山の形成に大きな影響を与えた佐渡金銀山は、長期間にわたり変遷した鉱石の採掘から金貨製造まで、金生産システムのほぼ全てが

残っている世界で唯一の金鉱山遺跡です。2010年に日本の世界遺産暫定リストに登録されました。この写真の建物のちょうど前で、いろいろな芸能人の方々に来ていただき、歌を歌ったりするイベントを開催しております(図-17)。今度はここで、日本一のファッションショーの開催を検討中です。

これまでの取組により、徐々にですが効果が表れています。これが佐渡のお米やその他いろいろな材料を使ったメイド・イン・サドのブランド創出についてです。ここにサドメシランと書いたものがあります(図-18)。佐渡と飯、ランは走るという意味です。サドメシラン、ミシュランにかこつけたものです。佐渡産品を積極的に取り扱う飲食店等を、佐渡産品提供店「サドメシラン(SADO MESHI RUN)」として認定し、生産者と飲食店等のマッチングを図ることで、島内生産者の販路が拡大され、新たな佐渡ファンを獲得しています。認定店は、現在、県外33店舗を含め72店舗となっています。関東エリアで29店舗、名古屋エリアで4店舗、そのほか新潟市にもあります。飲み屋さんを中心ですが、佐渡で穫れた材料をお送りして、皆さんに食べていただくという認定店です。島内への影響額は、年間約1億5千万円から約2億円の売り上げ増になっています。これが農家の方々、小規模な水産業者を潤しています。これをどんどん広げ

■往時をしのばせる街並み



図-15

■高付加価値化の取組



図-16

■佐渡金銀山 2010年11月世界遺産暫定リストに登録



図-17

ていこうと思っています。

また、ブランド米「朱鷺と暮らす郷」は、現在、百貨店等も含めて全国に500以上の販売店があります。「佐渡の米がおいしいわけがある」と書いてあります。県単位で大学との寄附講座をやるのはそう珍しいものではないと思いますが、一市町村が大学との寄附講座契約を結ぶというのは、そうはないと思います。佐渡市は新潟大学とその契約を結びました。その際に、科学的な分析をお願いしました。耐老化性の一番高い米を分析してもらいました。耐老化性が高いとおにぎりなどにした場合に大変おいしいということになります。佐渡米の食味は、最高ランクの「特A」を恒常的に受賞しており、耐老化性も他地区のブランド米と比較して高く、「冷めてもおいしいお米」として非常に高い評価をいただいています。

このお米を来年リオのオリンピックに持って行きます。選手の方々が、小腹が空いたときサンドイッチを食べるそうですが、徐々に日本食に移行する傾向もあると聞き、では、日本一おいしい佐渡のおにぎりを食べていただきたいということで、やっとのことでリオのオリンピックで提供するという契約に持ち込むことができました。さらには、輸出にも取り組んでいます。海外への販売ルートの開拓として、シンガポール、台湾への輸出を行っていましたが、

新たな輸出先の準備を進めています。

これまでの取組により、平成26年産米は、本年4月に契約率100%を達成できました。今後も、世界に通用する「メイド・イン・サド」のブランド化などをさらに推進し、6次産業化、農商工連携や産業間の連携による生産波及力を高めることによって、佐渡全体の生産力、経済力を高めていきたいと考えています。このことこそが、佐渡における地方創生であるだろうと考えています。

佐渡に生まれ、育った人たちが、佐渡に誇りを持ち、依存するだけではなく、まず自立するということを一一人が考えてやっていく、それを地方創生の原点として進めて参りたいと考えています。皆様方からいろいろな点でご指導をいただければありがたいと考えております。

ご清聴ありがとうございました。



図-18

人と自然が共に生きる、 大型水鳥類をシンボルとした地域づくり

島根県出雲市 市長
長岡秀人氏

皆様こんにちは。出雲市長の長岡秀人と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、出雲市の位置等については、案外ご存じでない方が多くいらっしゃるようですので、一応説明させていただきます(図-1)。ご覧のように、島根県の東部に位置しています。市域としては624平方km。ちょうど、東京23区と同じ面積です。そこに17万人の人が住んでおります。2市5町が一緒になりましたが、7つの自治体には自治体文化というものそれぞれございますので、その融合に苦勞をしているというところであります。

出雲といいますと、「出雲大社」ですが、60年に1度の大遷宮。今まさにその最中でございます(図-2)。平成20年から28年の3月まで、8年間に及ぶ期間が、平成の大遷宮と呼ばれる期間です。平

成25年の遷座祭というのがそのメインの行事です。その年には約800万人の皆さんが、この出雲大社においでになりました。ちょうど八百万の神様と同じ数が来られたということです。そのほかにも市内には、358本の銅剣や銅矛、銅鐸が一度に出土した荒神谷遺跡などがあり、古代ロマン溢れる歴史文化遺産の宝庫であります。

また、海、山、川、湖などの自然に恵まれ、平野もございまして、あらゆる自然が備わっています。市の中央部には、奥出雲の船通山を源とする斐伊川が流れています。かつては、そのまま日本海に抜けていましたが、だんだんと向きを変えまして、現在は、出雲平野で東に流れを変えて、宍道湖へと注いでいます。宍道湖から先は、松江市の中心部を流れる大橋川を通じて中海と繋がり、最



図-1



図-2

後は鳥取県との境にある境水道を通して日本海に至っています。この斐伊川は、島根県の東部、昔で言う「出雲の国」のほとんどを流域とする河川で、古来より洪水を繰り返してきました(図-3)。出雲神話のひとつ「八岐大蛇」神話は、洪水と先人たちの戦いの中から生まれたものだと言われています。また、斐伊川には、宍道湖と中海という2つの湖がありますが、これらはいずれも汽水湖でございます。連結した汽水湖というのは、世界的にも稀なもので、そういう意味でもラムサール条約湿地としての登録につながったわけです。登録からちょうど今年で10年を迎えております。現在、様々なイベントをやっている最中です。

また、斐伊川の話を話す際に忘れてならないのが、この川の上流一帯で、古くから盛んに行われていた砂鉄を製錬して鉄をつくる「たたら製鉄」です。このたたら製鉄で、原料の砂鉄をとるのに、土砂を川に流し、比重の重い砂鉄分のみを分離する「かなな流し」という方法が使われたため、下流域に大量の土砂が堆積し、出雲平野が広がっていききました。それとともに、ご覧のように市内の斐伊川は、網状砂州の発達した全国でも有数の天井川となりました。天井川ということで洪水の危険と隣り合わせというところがございます(図-4)。

斐伊川は、自然の恵み、平野をつくった反面、

洪水の歴史を繰り返しています。その斐伊川を何とか治めようということで、現在、この川では、「平成のおろち退治」とも言われている、大規模な治水事業が行われています。5千億円に及ぶ工事費をかけて治水事業を展開しているところです(図-5)。この事業は、河川の上流、中流、下流でそれぞれ機能を分担することから、「3点セット」と呼ばれています。まず上流では、この斐伊川と市内を流れるもうひとつの大きな川である神戸川の上流にそれぞれダムを造り、この2つのダムで洪水時における下流への流量を調整し、両河川の治水の問題を一度に何とかしようというものです。そして、中流部にあたる出雲市内には、この2つの河川を結んだ斐伊川放水路があります。これは人工的な

天井川となって流れる斐伊川



図-4

斐伊川流域の地勢・地形



図-3

斐伊川・神戸川流域の治水計画



図-5

バイパスで、斐伊川が氾濫して増水したときに、その洪水の一部を、神戸川を経て直接日本海に流すようにしたものです。この両流域のダム2つと放水路の工事は、すでに完成しています。今年度、幸いなことにこの分流が行われることはありませんでしたが、平成25年6月に斐伊川放水路が完成してから、これまでに3回の分流が行われています。分流することによって宍道湖の水位を下げる。それが結果的に平野全体の水害を回避するという効果を発揮しております。現在この治水事業の中心は、最後に残った下流部の大橋川の拡幅による改修や中海・宍道湖の湖岸堤整備などに移っています。この3つの事業によって、治水を完結しようということでもあります。今、残された大橋川の拡幅事業のためにいろいろと努力をしているところです。

さて、氾濫を繰り返してきたこの斐伊川ですが、一方で地域に大きな恵みをもたらしています。上流域では先ほどお話ししましたように、一大産業となったたたら製鉄を支え、中流域ではこのように度々流路を変えながら出雲平野を形成して、地域に豊かな実りをもたらしました。川がどんどん変わってきたということですが、松江藩の新田開発の土木技法のひとつで、川を変えることによって新田ができていったということでもあります(図-6)。下流

域では宍道湖、中海という全国で7番目と5番目に大きな湖が、独特の自然環境を育んでいます。

汽水湖である中海、宍道湖は、それぞれ塩分濃度の異なる汽水環境を形成しています。日本海とつながっている中海の塩分濃度は、海水の約半分。これに対して宍道湖は斐伊川の水量にもよりますが、海水のほぼ10分の1程度です。またシーズンによっても塩分濃度は変化します。こうしたことから、湖ごとに魚の種類が異なる、海の生物と淡水の生物が入り混じるといった、それぞれ異なる特色をもった多様な自然環境がつくられています。宍道湖には夕日の絶景とともに、様々な自然の恵みがございます。宍道湖のあたりで鯛が獲れたとかいう話もあります。湖を代表する魚介類は、宍道湖七珍や中海七珍などとも呼ばれていますが、中でも漁獲量日本一に返り咲いた宍道湖のヤマトシジミは、2年前に青森県の十三湖に日本一の座を譲りましたが、また復活いたしました(図-7)。地域が全国に誇るブランド品でもあります。宍道湖のほとりに、淡水魚だけを展示する「宍道湖自然館ゴビウス」という水族館があります。これがまた大変人気を集めている水族館であります。

さて、出雲市と大型水鳥類との関わりについてですが、この出雲平野から宍道湖、中海にかけての斐伊川中・下流域は、冬になるとハクチョウやガ

流路の変遷



図-6

宍道湖のシジミ漁



図-7

ンといった大型水鳥がやってくる全国的にも貴重な飛来地となっています。これは、20年間に斐伊川流域にやって来たコハクチョウの渡来数を表したグラフです(図-8)。ご覧のように、元は1,500羽前後だったものが、平成15年度には2,500羽まで増え、その後は2,000から2,500羽が安定的にやって来ています。最近、宍道湖と安来市の能義平野が主な渡来地となっています。また、これはマガンの渡来数を表したグラフです(図-9)。平成19年度までは年々増加し、多いときには約5,000羽がやって来ていますが、近年は若干減って3,500羽程度となっています。このほか、同じガン類のヒシクイが毎年100羽前後やって来ています。水系の中では宍道湖への渡来が圧倒的に多くなっ

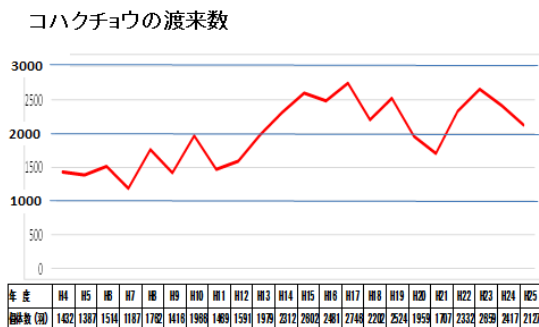


図-8



図-9

ています。

この中海と宍道湖は、多くの水鳥が生息する貴重な湿地であるとして、先ほどお話ししましたように、2005年11月にラムサール条約湿地に登録されました。宍道湖の西岸、宍道湖に注ぐ斐伊川本川の河口付近、そしてその周辺の水田等では、毎年たくさんのハクチョウやガンの群れを見ることができます。私も子どもの頃から、稲刈りを終えた周りの水田などで、羽を休め、餌をついばんでいるこうした鳥たちの姿をよく見てきました。住んでいる家の周りにも、いろいろな水鳥が来ます。結構人なつっこいと言いますか、あまり人を恐れないということがございまして、近づいて見ることができます。

この宍道湖西岸には、ホシザキ電機の先代の社長が創立されましたホシザキグリーン財団という公益財団法人があり、この財団によって整備された、人と自然の共存を目指した多自然型公園「宍道湖グリーンパーク」があります(図-10)。園内には野鳥観察舎やビオトープ等があり、近接する水田では、周辺農家の協力を得て冬期湛水も行われて、水鳥観察の拠点のひとつになっています。冬になるとこの公園や斐伊川河口などには、たくさんの野鳥愛好家がバードウォッチングに訪れています。

昨年の10月には高円宮家の次女典子様と出



図-10

雲大社神職の千家国麿さんのご結婚がありました。地域をあげて盛大にお祝いをしたところでした。お二人の出会いのきっかけとなったのが、お互いの趣味であるバードウォッチングだったということです。高円宮家の皆様も千家家の皆様も野鳥観察をされまして、冬になると各所に出かけて写真も撮られています。また、新しい種を発見されたときは報告があったりと、そういう方々でございます。「鳥たちが取り持った縁」ということで、縁結びのまちにふさわしい、大変面白い話題となりました。

また、時にはこの新聞にあるように、ナベヅルやマナヅルなどのツル類、コウノトリといった珍しい鳥がこの地を訪れ、話題となることもあります。最近では頻繁にいろいろな鳥が飛来してくるので、そう珍しいことではないという状況になっております。斐伊川水系とは少し離れており直接の関係はありませんが、出雲大社から島根半島を西に向かった日御碕にある経島は、ウミネコの繁殖地として、1922年、八戸市の蕪島とともに、全国で初めて国の天然記念物に指定されています(図-11)。このウミネコについても、毎年11月下旬から冬にかけて出雲にやって来ており、数千羽のウミネコで小さな島が真っ白になることもあります。

このように、出雲の国は、冬になるとたくさんの鳥がやって来る、鳥たちの宝庫です。ところが、地域

におけるこれまでの鳥に対する思いは、どちらかと言うと糞害や農作物に及ぼす被害などのマイナスイメージもあって、地域の資源として十分に活かしきれていないのが実態です。観光客なども少なくなる、冬の閑散期にやってくる鳥たちを、厄介者扱いするのではなく、共生しながら活かす地域づくりが必要であると思っていますところでは。

次に、出雲市が取り組んでいる「トキの分散飼育事業」についてお話しします。出雲市は、平成23年に4羽のトキを受け入れて、この分散飼育を始めました(図-12)。その翌年に1ペア、2羽を追加し、現在は6羽、3ペアで繁殖を行っています。飼育員の養成、飼育技術の指導や日常的な相談にいたるまで、佐渡トキ保護センターや東京動物園協会など多くの方の支援を受けながら、飼育は概ね順調に進んでいます。

出雲市のように、佐渡以外でトキを飼育する「分散飼育」は、他に東京の多摩動物公園、石川県のいしかわ動物園、新潟県長岡市の3カ所で行っています(図-13)。西日本で行っているのは出雲市だけです。分散飼育には、国内のトキの8割が集中する佐渡において、高病原性鳥インフルエンザ等が発生した場合に心配される、トキの絶滅の危険性を減少させる目的があります。また、飼育のみならず、佐渡で放鳥するトキの繁殖という役

経島のウミネコ



図-11

出雲市トキ分散飼育センター



図-12

割も担っています。

今年12日には、出雲市トキ分散飼育センターで、今年繁殖した3羽のトキの幼鳥を佐渡トキ保護センターへ移送しました。平成23年からこれまでに、佐渡トキ保護センターへ送ったトキは10羽、4羽、6羽、5羽、3羽の、合わせて28羽で、そのうち21羽はすでに佐渡の野生下に放鳥されています。出雲市と佐渡市とは、直線距離で約600km。陸路で新潟市まで行き、そこからフェリーを使うと輸送距離は900kmにもなり、実に17時間をかけて輸送しています。この距離が、感染症リスクの回避にも有効であり、出雲市で分散飼育をしている意味のひとつです(図-14)。ちなみに、出雲市で飼育するトキの親も、生れてきた子どもも国の機関、関東地方環境事務所の所有であり、佐渡トキ保護センターによって個体が管理されています。繁殖したトキは、全て佐渡で放鳥される候補個体となるため、出雲市で繁殖したトキは全て佐渡トキ保護センターに送ることになります。

これまでに放鳥された出雲生まれ21羽のうち、現在生存しているのは13羽と考えられています。生存率は約60%で、これが高いか低いかわかりませんが、やはり野生復帰というのはなかなか難しいなと感じています。一方、平成26年には、出雲生まれの放鳥トキに、初めて野生下でヒナが誕生する

という、うれしい出来事がありました。また、出雲生まれのトキが野生下で生まれたトキとペアとなり、佐渡で初の野生3世を誕生させました。出雲生まれのトキが、野生復帰に大きな貢献をしていることを誇りに思っています。まさに縁結びの神・出雲大社のあるまちの代表としての面目躍如といったところです。今後も、「トキ野生復帰ロードマップ」に従って、放鳥候補個体を供給するなど、国のトキ保護増殖事業に貢献して行きたいと考えています。

日本で野生のトキが最後まで生息していたのが佐渡です。それより前、本州最後のトキは、石川県能登半島に生息していました。さらに遡ると、島根県の隠岐の島で絶滅したのが昭和20年だと言われています。出雲地方には、大正期に「宍道湖にトキ、ハクチョウ来る」との記録が残り、このように、出雲国産物帳にも、トキについての記載があります。トキを「紅鶴」と書いていたようです(図-15)。そのほか「牛からす」、「白からす」は、いずれもトキの方言だったようです。それが江戸時代の話で、昔は、日本各地にトキは普通の鳥として生息していたようです。

さて、出雲市がトキの分散飼育を始めたのは何故か。その背景には、平成8年に友好都市協定を締結した中国の漢中市との交流があります。漢中市にある洋県は、当時、中国でも絶滅したと思わ

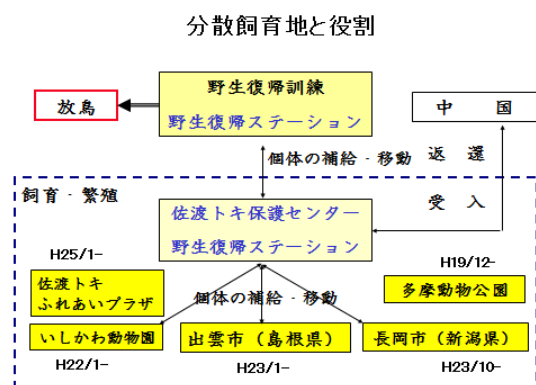


图-13



图-14

れていたトキが、1981年に再発見された地です。漢中市との交流のなかで、平成12年からは「陝西トキ救護飼養センター」のトキの飼育支援、「認養」を行ったことなどで、徐々にトキへの関心が高まり、平成17年には、「NPO法人いずも朱鷺21」が設立され、市民のなかに、是非出雲でもトキ保護に協力をという機運が盛り上がり、トキの分散飼育を行う契機となりました。

トキによるまちづくりを進めるために、行政や市民団体、JAなど、各種団体からなる「出雲市トキによるまちづくり協議会」を組織し、平成23年には「トキによるまちづくり構想」を策定しました。安全・安心な住みよい出雲市を目指し、トキをシンボルとした環境のまちをアピールしたいと考えているところです。まずは、トキそのもの、そしてトキ保護増殖事業への理解を深めるため、マスコットキャラクター「ミコトッキー」の作成・活用や、平成23年にオープンした「トキ学習コーナー」などで、出雲市の取り組みや佐渡市の取り組みも紹介しています(図-16)。

現在、佐渡で放鳥されたトキが1～2羽石川県で確認されています。また、本州から佐渡へ帰ったトキもいます。佐渡でトキの生息数が安定すれば、自然と本州への生息範囲も広がるのではないかと期待しています。お話をうかがうと、残念ながら

日本海を渡って本土へ遊びに来るトキは全部メスだということで、もう少し勇気のあるオスに来てほしいなと思っております。島根県、出雲市まで飛んで来るには時間がかかるかも知れませんが、出雲で生まれ育ったトキがしっかりと佐渡で繁殖し、その子孫が出雲へ飛んできてくれるよう願っているところです。出雲市の取り組みはまだ道半ばですが、佐渡市をはじめ多くの先進事例に学びながら、市民とともにトキと共生できる地域をつくっていきたいと考えています。

さて、そんな思いを強く抱いていたところ、今年、斐伊川を管轄管理している国土交通省出雲河川事務所が中心となり、「斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会」が立ち上がりました(図-17)。協議会の会長は、ここにおいで涌井先生でございます。斐伊川水系は大型水鳥類が安定的に生息可能な潜在性を持つ、大変貴重な地域であることに着目し、その鳥を指標とし、河川を軸にした水辺環境の保全・再生と地域経済の活性化が両立できる生態系ネットワークの形成を目指して行くことにしました。当初、この取り組みは、出雲市のエリア内からということでありましたが、鳥にとって市境、県境も全く関係ないということで、また、鳥たちは宍道湖・中海圏域を含めた広い範囲に集まって来

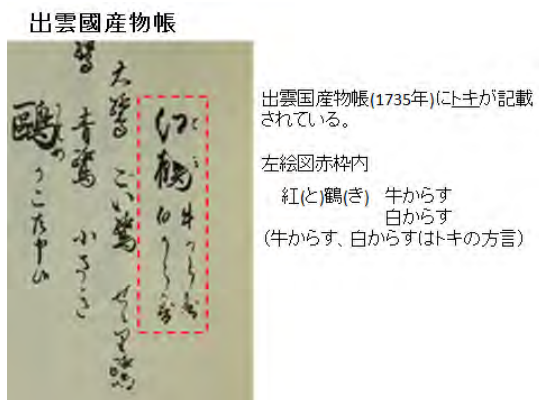


図-15

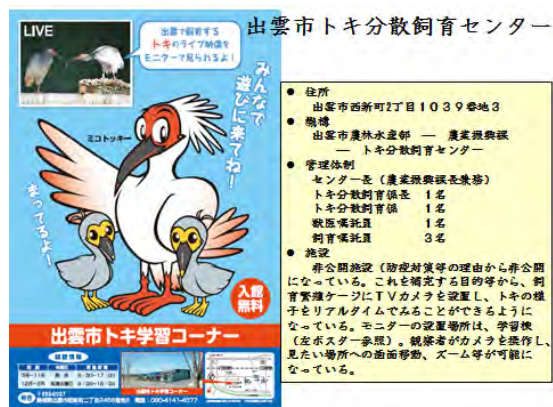


図-16

ているという状況から、流域全体で一体的に取り組むという方向になりました(図-18)。

生物多様性や鳥類の専門家はもとより、出雲河川事務所のほか、島根、鳥取の両県、宍道湖・中海沿岸の5市である出雲市、松江市、安来市、米子市、境港市、また、圏域内のJAや漁協、経済団体などが一堂に会して、この協議会に参加しています。この5市ではすでに、県境を越えて5市の市長会「中海・宍道湖・大山圏域市長会」を組織して、圏域の共通課題に連携して取り組んでいるところであります。その共同で取り組むべき事業のひとつが環境でございます。世界にも希な汽水湖をもっている我々が、しっかりとこの流域の環境を守っていこうというのが大きなひとつの目標であります。そういった共通課題に取り組むなかで、生態系ネットワークの形成についても協力連携し、水鳥たちの生息環境づくり、地域の特性を活かした地域振興の取組みを進めて行きたいと考えています。

協議会設立に先立って、今年1月には、ここおいでの豊岡市の中貝市長さんをお招きし、「地域の自然で人が潤う」をテーマにした「出雲の地域づくりフォーラム」を開催しました(図-19)。中貝市長さんには大変お忙しい中おいでいただき、お世話になりました。鳥を中心にして地域の持つ自然

の豊かさ、その自然や生態系ネットワークを活かした地域づくりのあり方等について研鑽を深めることができました。

こちらの取り組みはまだ始めたばかりですが、ハクチョウやガンに加え、ツルやコウノトリ、そしてトキがこの地域の空を華麗に舞う姿を思い描きながら、宍道湖・中海圏域の関係機関や市民の皆さんと一緒に、この地域ならではの資源を最大限に活かしながら、魅力ある地域づくりを進めて行きたいと思っています。

月日の経つのは早いもので、すでに今年も11月後半となりましたが、旧暦で言うともまだ10月です。全国では、この10月を「神無月」と呼ぶのに対し、唯一出雲では「神在月」と言います(図-20)。実



図-18

斐伊川水系生態系ネットワークによる
大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会



図-17

出雲の地域づくりフォーラム



図-19

は丁度、明日11月21日が旧暦の10月10日にあたります。この10月10日というのが、出雲の地では出雲大社を中心に、全国から八百万の神々をお迎えする最初の日で、「神迎祭」が催行される日でございます。この全国から神様がお集まりになられる時期と相前後して、ハクチョウやガンなど、多くの鳥たちが出雲の地にやって来ます。これも何かの不思議な縁かなと思っているところでございます。

皆様、是非、縁結びの地、神話のまち出雲の方へ、たくさんの鳥たちに会いに、お越しいただけたらと思っています。新たな出会い、良い縁を求めてお越しください。私どもがご縁のまちというのは、人と人、男女のご縁だけではなくて、地域、また国も含めて、多くの皆様との交流にしっかり取り組んで行く、これが私ども出雲市の基本的な使命と考えています。

今日、このような場で報告をさせていただく機会を与えていただきましたことに、深く感謝を申し上げ、また出雲の地でお会いできることを楽しみに、以上で報告を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。



図-20



渡り鳥との共生を核とした 持続可能な地域づくり

宮城県大崎市 市長
伊藤康志氏

宮城県大崎市長でございます。ありがとうございます。今日はお招きをいただいて、この渡り鳥、とくにマガンに選ばれた大崎市の取組を報告できますことに感謝いたします。

報告を申し上げる前に、お礼を申し上げなければいけないと思っております。4年8カ月前の東日本大震災のときにも、大変に皆様方にお世話になりましたが、実は2カ月前の9月11日にございました関東東北豪雨の折にも皆様方に激励、お見舞いをいただきましたことを厚くお礼申し上げたいと思っております。突然の大雨で、中小河川を中心に、約3000ha、700世帯が浸水されました。2300人もの避難者等々があったところです。また刈り入れ、取り入れ直前の農作物の被害も心配をいたしました。4年8カ月前の生きた体験（東日本大震災）が

残っておりまして、応急対応、また避難者支援、被災者支援等々に取り組んでまいりました。おかげさまで、人的被害がなかったことに安堵いたしております。今、懸命の復旧、そしてまた被災者支援を行っているところです。たくさんの支援物資もいただきましたこと、厚くお礼を申し上げたいと思っております。

さて、今日のテーマでございますが、大崎市においでいただいたことのある方もいらっしゃると思いますが、宮城県の北部にございます。合併をいたしまして来年3月で10年を迎えます。約14万近い人口があり、面積は800平方km、東西に80kmという大変に長い大崎市でございます（図-1）。鳴子温泉、あるいはササニシキ、ヒトメボレの誕生の地、古川など1市6町が合併をいたしました。現在、



図-1



図-2

宝の都(くに)・大崎を目指して、まちづくりを進めています。西の方に鳴子温泉があります。鳴子温泉には、9種類の泉質、400本ほどの源泉。源泉かけ流しということで、たくさんの方々においでいただいています。「温泉の横綱」がご縁で、本物の横綱(白鵬関)にもおいでいただきました(図-2)。写真左側、本物の横綱の隣にいるのは相撲取りではなくて私でございます。4年8カ月前の震災の風評被害がありましたので、どうぞみなさんおいでくださいとお迎えを申し上げているポスターです。

大崎の恵まれた資源、宝は東にもございます。今日のテーマでございます、2つのラムサール条約湿地に登録された蕪栗沼、そして化女沼です。10kmほどの距離のなかに渡り鳥の重要な越冬地が2つあり、そこがラムサール条約湿地になっています。この地図の約10km北の方に伊豆沼、内沼というのがあります。宮城県の北部には3つのラムサール条約湿地があり、ラムサールトライアングルを形成しているところであります。蕪栗沼はマガンの国内最大級の越冬地です。また、化女沼はヒシクイ、シジュウカラガンなどの国内最大の越冬地です。

今日の報告は、そのなかの蕪栗沼についてです。蕪栗沼の周辺には、広い水田があります。「蕪栗沼・周辺水田」というのが条約湿地の正式名称

です(図-3)。水田が名前に入った世界初のラムサール条約湿地ということで、水田が稲作の生産だけではなく、渡り鳥や生物の多様性を支える重要な場所であるとの認識を得た記念すべき湿地です。ここではワイズユース(賢明な利用)の取組をさせていただいているところであります。

先程来、皆様より大型鳥類の紹介がございましたが、この報告の主役でありますマガンについて、改めてご紹介申し上げますと、翼を広げますと150cmぐらいの大型の水鳥でございます(図-4)。主に田んぼの落ち穂などを餌としています。今日の主役の鳥たちは肉食系の水鳥が多いですが、私のところのマガンは草食系ということになっております。毎年大陸シベリアから大崎市を目指して、多くの渡り鳥が飛来しております。ここで動画をご覧ください、その飛来しているマガンの楽園、蕪栗沼に皆様方をご案内申し上げたいと思います。躍動的な大パノラマをお楽しみください。周辺の田んぼでお腹いっぱい落ち穂を食べた渡り鳥が、夕方蕪栗沼にねぐら入りする様子です。

マガンの習性だと思いますが、行く時は大きな群れで出発して、帰る時は中小規模の群れで戻ってくるようです。現在5万羽くらい飛来しています。まもなく2桁、10万羽になります。この3つのラムサール湿地で18万羽程度飛来し、日本に飛来するマ

ラムサール条約湿地「蕪栗沼・周辺水田」



図-3

大崎を代表する鳥『マガン』

特徴

ロシアで繁殖し、日本で越冬する

渡り鳥

翼を広げると150cmの大型の水鳥

習性

日中は水田で落ち穂や草などを食べる
夜間は湖沼で就寝する

生態

日本に飛来する80%が大崎市周辺で越冬
大崎市周辺に約18万羽が飛来する



図-4

ガンの8割が越冬するということでございます。これだけ集中する理由は、ひとつには、地球温暖化の影響ではないかと思っております。日本各地で越冬していたマガンでしたが、北の方に偏ってまいりました(図-5)。それと、ねぐらや餌場となる湿地や水田の開発が進むなかで、大崎市のある宮城県北部には、この渡り鳥マガン類の越冬にとって適した湿地が残されていた。加えて、周辺に大崎耕土(広大な水田地帯)と言われる豊富な餌場があったということ、これが集中する要因ではないかと思っております。

その渡り鳥とは、今でこそ共生のまちづくりを進めておりますが、最初からそうであったわけではありません。たくさんの渡り鳥が越冬地を求めて訪れるようになりましたが、農家の方々からすると大事なお米を食われるのではないかということの心配から、一時期は害鳥扱いもされました。一方、NGO、NPOの方々は保護という立場を取っていました。それぞれの立場で大分利害が相反する時代も重ねました。しかし、お互いが協調し合うなかで、知恵の共有がなされ、対立から共生へと発展していきました(図-6)。そして、NGOが持っている専門的な渡り鳥の知識と農家の方々の良いお米を作りたいという願い、行政の調整機能、こういうものから生み出されたものが、「ふゆみずたんぼ」という

手法です。

「ふゆみずたんぼ」は、本日他の方々からもご紹介がありました。冬期湛水栽培は、私の地域でも以前より一部の農家が行っておりました。渡り鳥が多くなりましてから、地域的に集団的に取り入れることにしました。冬に取り入れが終わった田んぼに水を張って、まさに「ふゆみずたんぼ」というねぐらを提供する試みを行いました(図-7)。そのことによって、渡り鳥もゆつくり、ゆつたりと越冬できるということになりました。そして、気がついてみたら、美味しいお米がたくさん収穫できるようになりました。まさに、三方一両得のようなかたちになりました。

この取組は、農家が害鳥として見ていた渡り鳥にねぐらを自ら提供し、無農薬・無化学肥料栽培



図-6



図-5



図-7

という自然共生型の稲作栽培を行う。結果として、大変おいしい、安全安心なお米が生産、高く取引されるようになりました。さらに、お米作りだけでなく、地元の企業にもこの連携が広まりました(図-8)。大崎市には7つの造り酒屋がありますが、もっとも大きな一ノ蔵というところが、ふゆみずたんぼのお米と酒米として契約しました。そのままずばり「ふゆみずたんぼ」のお酒として売り出されています。お米もふゆみずたんぼ米ですが、お酒も製造されています。今日皆様方にもご賞味いただけるようにお持ちをさせていただいたところでございます。

加えて、新たな取組といたしまして、広大な蕪栗沼に自生しておりますヨシを、かつては野火を行っていましたが、この取組に学び、一部のヨシを刈り取り、ヨシ・ペレットを製造するようになりました。そして、現在、大崎市民病院のバイオマスボイラーで活用して、CO2の削減とともに、ヨシの価値化を進めさせていただいているところでもございます(図-9)。

そしてこの取組を、現在実践している方々だけではなくて、次の時代に伝えていこうというなかで、環境教育プログラム「おおさき生きものクラブ」を設立しました。現在279名の子どもたちが参加しています。このように、蕪栗沼・周辺水田を核に様々

な取組を開始しております。生き物調査や農業体験など、たくさんの体験をしていただいているところであります(図-10)。この取組が大崎のなかだけに留まることなく、さらに広域的な連携も進めてまいりました。今日すでに発表された佐渡市、この後発表される豊岡市、小山市などと共に、「世界一田めになる学校 in 東京大学」などで、各市の子どもたちが連携を密にして、お互いの実践例に学びながら広域連携を進めているところです。

さらに、農業の分野だけではなくて、この取組が、シティプロモーション、あるいはツーリズムにも大きく発展をしてきました。先ほど来、イメージキャラクターの紹介がたくさんありましたが、スライドの左にありますのが、マガンのキャラクター「パタ崎さん」



図-9

渡り鳥との共生が生んだ成果：地域加工技術との連携



図-8

次世代を育てる：おおさき生きものクラブ

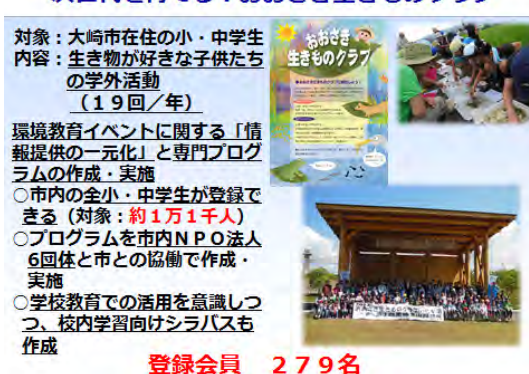


図-10

です。とっても居心地のいい大崎に永住したいと申請がございましたので、市長として許可をしました。その代わりに、世界を、そして日本中を飛び回ったなかで知った大崎の良さを、国内外や世界にPRしていただきたいということで、広報大臣に任命しました(図-11)。

このパタ崎という名前は、パタパタと大崎を大いに宣伝して飛び回るという意味で、子どもたちが命名いたしました。写真では見えないですが、背中に大きなリュックサックを背負っています。大崎の恵まれた資源や素材などの宝を大いに宣伝していただくという任務を負っています。子どもたちにも大変人気で、最近では、市長さんは来なくてもよいから、パタ崎さん来てくださいということもよくあります。

また、先ほど動画を見ていただきましたが、大型鳥類の躍動的な群の姿を是非間近に見たいという方も多くいらっしゃると思います。海外から来るお客様にも大好評です。今後のインバウンドでもひとつの目玉になるのではないかと考えております。関連商品の開発や販路拡大も進めているところでございます。

まとめさせていただきますと、渡り鳥との共生のまちづくりの取組は、まさに地域での経済活動や環境活動、子どもたちをはじめとする人づくり、シテ

イプロモーションというかたちで大きく発展してきたところでは、渡り鳥との縁で気づかせてもらったこと、震災などで持続可能な資源循環型社会というものの必要性を認識したこと、これらの相乗効果もありまして、今、この地域になくてはならない市民活動であり、大崎の売りということになっています。そして、この渡り鳥との共生のまちづくりの取組をさらにステップアップしていこう、大崎の取組を次の時代に丸ごとつないでいこうという考えから、また、持続的発展という意味も込めて、FAO（国連食糧農業機関）世界農業遺産への認定申請の準備を行っているところであります。

今日ご出席の佐渡をはじめとした皆様の先進
実例がございますが、大崎も同様の取組をしてま
いりたいと思っています。とくに大崎の場合は、渡り
鳥に気づかせていただいた、縄文の森から湧き出
るきれいで豊富な水、地域資源、そして母なる川
に抱かれた、まさに生産、生物を育む豊饒の里、大
崎耕土があるということ(図-12)。また、そこから生
み出された稲作文化、農村文化、食文化というも
のの宝庫であるということ。これらを次の世代に引
き継ぎ、ステップアップしていきたいと考えている
ところであります。そして、それらの思いが結実いた
しまして、今年の秋、期待の星、新しいお米が誕生
しました。各地においしいお米がありますが、日本



圖-11



图-12

のお米は、今8割以上がコシヒカリ系になってしまいました。しかし、かつてのササニシキ系は、あっさりして冷たくなってもおいしい、とりわけおにぎりや和食に大変適しています。このササニシキのおいしさを引き継いだ新しい品種「ささ結」です(図-13)。生産者と、消費者、各地域と結ばれていこうという思いを込めて、今年、デビューしました。「ささ結」は、粘り控え目、あっさり、サラサラ系で大変においしいお米です。皆様方にも是非ご賞味いただければと思っております。ささ結についてご紹介を申し上げて、私からの報告にさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



図-13

コウノトリと共に生きる ～豊岡の挑戦～

兵庫県豊岡市 市長
中貝宗治氏

豊岡は兵庫県の北部、日本海に面したまちです(図-1)。コウノトリのまちでもあります。コウノトリは、羽を広げると2mもある白い大きな鳥です。かつては日本の各地で見られる鳥でした。里山の大きな松の上に巣を作って、周辺の田んぼや川の浅瀬で餌を捕っていました(図-2)。カエルやナマズやドジョウ、フナ、ヘビも食べる完全肉食の大型の鳥です。しかし、環境破壊によって数を減らし、1971年、日本の野生最後の一羽が豊岡で死んで、コウノトリは日本の空から消えました。とどめを刺したのが農薬です(図-3)。絶滅の前にコウノトリを守ろうと飛んでいたコウノトリを捕まえて、豊岡で人工飼育が始まりました。しかし、最初の24年間1羽の雛も孵りませんでした。待望の雛が孵ったのは25年目の春、1989年のことでありました。以来27年連

続で雛が孵って、今、鳥かごの中で96羽が暮らし、そして82羽が再び自由に空を飛び回っています。

2005年、最初の放鳥の映像をご覧ください。このとき野生での絶滅から34年が経過しています。



図-2



図-1



図-3

最初の1羽が飛んだ時、「やった」と大きな声がしました(図-4)。豊岡市長の声でありました。野生復帰の最大のねらいは、「コウノトリも住める豊かな環境を創造すること」。コウノトリは完全肉食の大型の鳥です、あんな鳥でも、また野生で暮らすことができる」と、そこには膨大な量の、そしてたくさんの種類の生きものが存在するはず。そのような豊かな自然は、人間にとっても素晴らしい自然であるに違いない。

もうひとつあります。どんなに自然が豊かになって餌が豊富になったとしても、飛んできた鳥をやみくもに撃ち殺す、そういった文化のところにコウノトリは暮らすことができません。「あんな鳥が近くにいるって素敵だ」、そう思えるおおらかな文化が人間の側になければなりません。そこでコウノトリを空に返そうということを合言葉にして、コウノトリも住めるような豊かな環境、豊かな自然環境と豊かな文化環境をもう一度つくりあげる、それが最大のねらいです(図-5)。

コウノトリは、もうすっかり豊岡の風景に溶け込みました。農家の男性とコウノトリ、よく似ています(図-6)。後ろを走っているのは特急こうのとりです。三江小学校では、3年連続雛が孵って巣立っています。この花火の写真は、コウノトリが人間の生活に適応し、あるいは辛抱している写真です。豊岡の

コウノトリは、日本各地に飛んでおりまして、これまでに40府県273市区町村で飛来が確認されています。さらに国境を超えるコウノトリも出てきました。豊岡の野外で生まれた1羽のメスが、山口県長門市に行きました。そして、今年の3月、韓国の金海市で発見されました。その後各地を転々として、今年の4月、1年1カ月ぶりに帰ってまいりました。

山口県長門市というのは、安倍総理の故郷です。金海市に3月18日に行きまして、その一週間後に日米韓の首脳会談が開かれました。その弟のコウノトリは、鳥取、佐世保に行きまして、韓国に渡りました。また、山口に帰ってきまして、10月28日、再び韓国に渡りました。皆さんご存じのとおり1月2日に日韓首脳会談が行われました(図-7)。



図-5



図-4



図-6

日本と韓国、あるいは日本と中国は、歴史のある一時期を見れば見るほどいがみ合いますが、コウノトリあるいは環境に関して言うと、同じ方向を向いて歩けるはずだ、そう思います。韓国でも一度野生で絶滅しましたが、今年の9月3日に放鳥されました(図-8)。放された8羽のうち2羽は、豊岡のコウノトリの郷公園から送られた二世であります。この放鳥拠点のイエサン郡には、コウノトリの公園があり、ゲストハウスがあります。これはそのなかの展示です。コウノトリの生息地の地図があり、そして、こう書かれてあります。「2005年豊岡、世界で初めて再導入(図-9)。」つまり、韓国のコウノトリ関係者の方々の豊岡に対する非常に深い敬意を強く感じることができます。もちろん、私たちも

また、韓国の人々の野生復帰に向けたその努力に強い敬意を払いたいと思います。お互いが尊敬できる分野があるはずだ、そのように思います。

豊岡が開きつつある新たな扉は「環境経済戦略」です。(図-10) 環境と経済は相いれないと固く信じられています。しかし、そうでない分野があります。環境を良くすることによって経済が活性化される。そのことが誘引となって、環境を良くする行動がさらに広がる。環境と経済が共鳴する関係を「環境経済」と名付けて、豊岡ではそれを広げる努力を重ねています。最大のねらいは、持続可能性、環境行動自体の持続可能性です。環境に良いことをすれば良いということは誰だって頭で分かります。しかし、長続きしません。みんな日々の暮ら

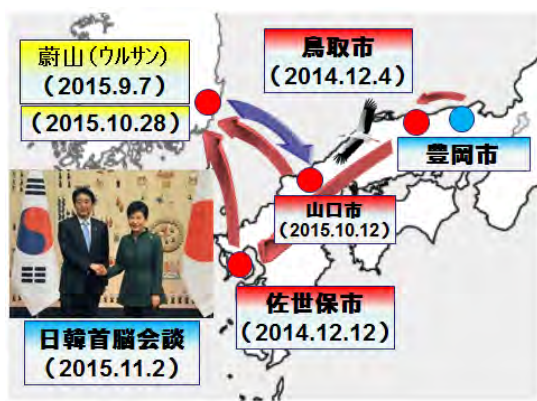


図-7



図-9



図-8



図-10

しがあるからです。しかし、環境を良くする行動は、長く続けないと、そして仲間を増やさないと結果を得ることはできません。そのためには、経済を敵に回すのではなく、味方につけた方が得だ、そういった考え方です。

具体例です。豊岡に10年ほど前に誘致したカネカソーラーテックという太陽電池を作る会社があります。世界中の人々が、地球温暖化対策に貢献しようとして、この会社の太陽電池を設置すればするほどCO2は減ります。この会社は儲かり、雇用は発生し、税収は増えます。環境と経済は共鳴するという一例です。この会社と組みまして、豊岡は市内各地にメガソーラーをはじめ、大規模なソーラー発電所の設置を続けています。環境経済事業の定義は、「利益を追求するものであること、同時に環境に貢献するもの」です。これまでに49事業を豊岡市環境経済事業として認定しています。昨年度は46事業でしたが、その売上総額は95億6千万円。環境経済は、確実に豊岡の経済を支え始めています。

農業もちろん重要です。コウノトリに最後にとどめを刺したのは農業でした。そこで、農業に頼らないコウノトリ育む農法を広げてきました。その作付面積の推移です(図-11)。上が完全無農薬、下が通常より75%農薬を減らしたものです。日本各

地で売られています。店頭価格で、通常のお米より減農薬タイプで5割前後高く、無農薬タイプでは10割前後高く売られています。これはJAの買い取り価格でありますけど、一般米が昨年の数字で5,900円、減農薬タイプ7,900円、無農薬タイプ11,000円、これは30kgです。さらに実際の所得の比較をしてみますと、一般米は作れば作るほど赤字になります。でも減農薬・無農薬ですと、これは後環境支払いなどのお金も含めた金額でありますけど、確実に所得があります。その優位性は明らかになってきています(図-12)。

今年の10月までミラノ万博が開かれていました。日本館は大人気でありました。このテーマは食と農業です。豊岡市から農水省に働きかけをしまして、日本館で流れている映像のシンボルに、コウノトリを使っていただきました(図-13)。日本館にはフードコートがあります。日本食を食べていただくコーナーです。日本から、京料理の美濃吉、あるいはCoCo壱番、モスバーガーなど7店舗が出店しました。ここで使われたお米は、全てコウノトリを育む農法のお米です。24.5トンをお買い上げいただきました。ミラノ万博で紹介されたお米だということを紹介しますと、国内で3割、この期間売り上げが上がりました。

さらに私たちは今、輸出を始めようとしています。

環境創造型農業

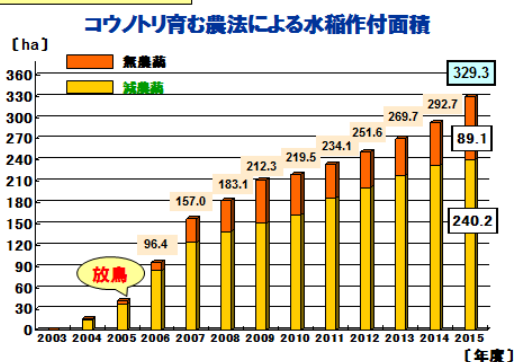


図-11

コウノトリ育むお米の経営試算

【2014年度実績】

種 別	実質所得
一 般 米	△2,110円
コウノトリ育むお米 (減農薬)	45,889円
コウノトリ育むお米 (無農薬)	82,000円

【※10aあたり】

図-12

今月のはじめ、ニューヨークに職員を派遣し、その可能性を探ってまいりました。農産物に関してアメリカにやられっぱなしでありますので、来年度からは本格的にやってみようと考えています。シンガポールでは、来年の1月、伊勢丹スコッツ店で試験販売することが決まりました。もう間もなくミラノにも豊岡のお米を出発させます。検疫が非常に厳しい国でありますので、ごはんパック、レンジでチンとすれば食べられるように加工し、ミラノに送り出すことにしています。アメリカ、ミラノでは、量は稼げないと思いますが、ブランド価値を高める、そういう戦略でニューヨーク、ミラノをねらっています(図-14)。コウノトリ・ツーリズムも盛んになってきました。コウノトリの郷公園にお越しの方は年間30万人程

度です。

コウノトリの野生復帰のおさらいです。横軸に時間があります。コウノトリは1965年から確実に増えてきました。環境創造型農業も広がってきました。湿地再生、人材育成、環境経済、その他も広がってきました。この時間と分野によって広がる、この全て、丸ごとこそが、野生復帰の実態であります(図-15)。それは結局、「人間にとっても素晴らしい環境をつくること」にほかなりません。この事業の事業主体は、一体だれなのか。それは、様々な構成員からなる豊岡という地域そのもの。あるいは豊岡の地域社会です。ここには、市民がもちろんいて、子どもたちがいて、農家がいる、JAがいる、様々な機関がいる、国の機関もあって、また豊岡には住んでいないけれども豊岡の外から共感をして一緒になって努力をしていただいている方々がおられます。その全ての方々からなる豊岡という地域そのものが、野生復帰の主体です(図-16)。自分たちの地域をコウノトリも住めるようなまちにしたいのか、したくないのか、その選取りは優れて自治の問題でありまして、豊岡はコウノトリと共に暮らすという道を選択いたしました。

アラン・ワイズマンというアメリカ人のジャーナリストがいます、世界的なベストセラー「人類が消えた地球」の著者です。その方が「滅亡へのカウント



図-13

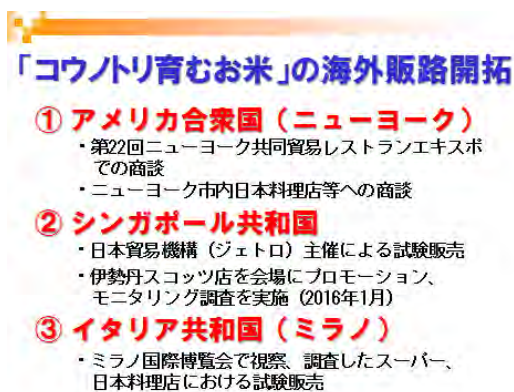


図-14

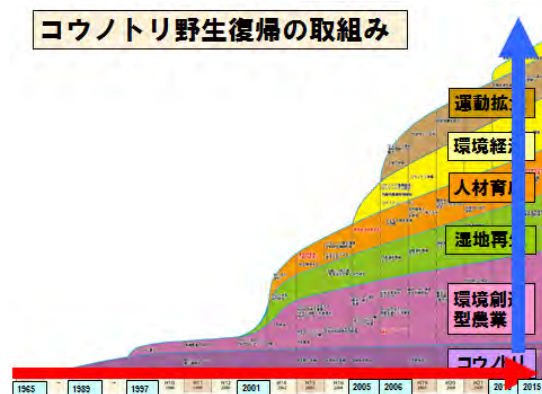


図-15

ダウン」という本を出しています。この本について彼はこんなふうに言っています。「豊岡市にある農家では、殺虫剤をまったく使わないオーガニック米を作っています。その結果、コウノトリが町へと戻ってきたのです。本書のなかで最も希望がもてるストーリーのひとつです」。しかし、今日、各地の報告を聞いて、これ以外にもたくさん、実は希望があるということを私自身実感いたしました。

これまでのコウノトリ野生復帰の取り組みを映像でご覧下さい。

市役所の職員と地元の映像会社が想いをこめて作った映像でありました。結局、私たちを野生復帰に向けて突き動かしてきたもの、それは「命の共感」です。人間とコウノトリと姿形は違いますけれども、同じ命だ。その共感こそが私たちの原動力でありました。日本中が命の共感に満ちたまちになることを期待しながら、私のスピーチを終わらせていただきます。

ありがとうございました。

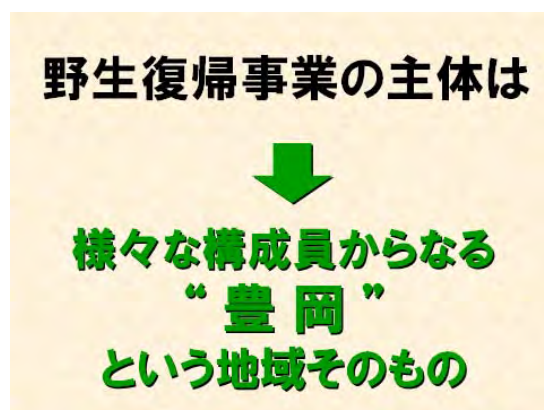


図-16

コウノトリが運ぶ農業の未来 ～お接待文化が息づく徳島の取り組み～

徳島県 知事
飯泉嘉門氏

ただ今、ご紹介いただきました徳島県知事の飯泉嘉門です。今日は池谷会長さんをはじめ、日本生態系協会の皆様方には大変貴重な講演の場をいただきまして、本当にありがとうございます。また、小山の大久保市長さんにおかれましては、御高配をいただきましてありがとうございます。

それでは、早速「コウノトリが運ぶ農業の未来～お接待文化が息づく徳島の取り組み～」についてご紹介していきたいと思います。今日のラインナップはこちらのとおり。4本立てとなっております。まずは徳島県の紹介であります。東京オリンピック・パラリンピックの招致の際、滝川クリステルさんが「お・も・て・な・し」と語りました。実はこの「おもてなし」。四国八十八か所霊場のお接待文化からきておりまして、徳島は、その1番から23番まで、「発心の道場」と言われております。

また、今年、「架橋30周年」となりました「大鳴門橋」であります。架橋された時は、「東洋一」のつり橋。徳島と続く淡路島は、現在は兵庫県ですが、明治には徳島県でありました。また、ベートーヴェンの第九、日本初演の地は鳴門徳島でありました。「奇跡の収容所」と呼ばれ、青島（チンタオ）のドイツの俘虜の皆さんを人道的な扱いを行った。この松江所長さんは会津の出身。ベートーヴェン第九の初演は、1918年の6月1日。ちょうど2018年の100周年に近づいているところ。徳島のレンコンはと言いますと、東は茨城、西は徳島。品種が違

いまして、関西で正月に使いますが、徳島の「備中種」であります。

さて、この鳴門・徳島に、コウノトリが飛来して参りました。今回飛来したコウノトリは、メスは朝来市生まれ、オスは豊岡市生まれであります（図-1）。実は徳島には、2013年から度々飛来していたのですが、今回のように巣作りをしたのは、豊岡周辺以外では初めてであります。先程、中貝市長さんからございましたように、「放鳥から10周年の記念の年」、今年であります。少し巣作りの様子を見ていただきましょう。

ただ、映像を見て気になりますよね・・・電柱に営巣をしたんですね。これでは、いけないと、すぐさま四国電力の方にこの電信柱の電源を止めてもらいました。午前中に申し入れたところ、午後には工



図-1

事完了という、「電光石火」の対応。パイパス工事でコウノトリの営巣しているところに電気を通さないという、「粋な計らい」となったところであります(図-2)。

次に、定着を進めなければならないということで、「お接待文化の息づく徳島」でありますので、「お接待作戦」を強力に推進をいたしました(図-3)。

まず、組織であります、よく三位一体という言葉がありますが、今回は、「三位一体」どころか、「五位一体」というところでしょうか、地元JAの皆さん、また大学関係者、鳥類の専門家、更には生産者の皆様にも加わっていただくとともに、アドバイザーとして兵庫県立大学の皆様にもお加わり頂いて、5月21日に「コウノトリ定着推進連絡協議会」が発足しました。営巣したのが、5月上旬でありますので、すぐさま対応させていただいております。

その中では、5つ部会をつくらせていただいております、まず1番目は、生物調査部会ということで、コウノトリの食性や水生動物の調査を行って、2番目に餌場の確保部会へと繋がっております。先程、映像がありましたように、ピオトープを設置し、餌場として活用していこうと。またもうひとつ問題なのが、「コウノトリが来た」ということで、マスコミの皆様を通じ、全国に報道されました。多くの皆さんが「コウノトリを一目見たい」、「それを映像で撮りたい」と。

しかし、コウノトリの目線に人の視線が入りますと、立ち所に逃げてしまう習性があります。そこで、啓発部会を設けて、この機会に観察者のマナーを手厚く作り上げていこう。次に、しっかりと営巣し、子育てをしていただく必要があるとして、果たして電柱のままでいいのか、「巣塔の設置」を考えた方がいいのではないか、営巣部会ではその研究をスタートさせました。また、ブランド推進部会では、生産者団体の皆さんにも加わっていただいておりますので、農業振興、あるいは地域振興に結びつける「ブランド」を考えるべきではないだろうか。これら5つの部会を同時にスタートさせていただいたところでもあります。

それでは、それぞれの部会の活動を紹介させていただこうと思います。

まずは、1番目の「生物調査部会」であります、実はコウノトリはいろいろな生き物を食べております(図-4)。少し映像でご覧いただこうと思います。

(動画の解説)

大きなカエルを捕まえました。食べるかなーと思いましたが、ちょっと大きすぎたみたいですね。隣にもっと面白いものを見つけたみたい。「ザリガニ」です。器用に振るってハサミを落とし、ものの見事に「パクリ」と食べてしまいました。美味しそうです



図-2



図-3

ね。

実はこのアメリカザリガニ。レンコンにとっては、まさに害虫といえますか、田んぼに穴をあけて水を落としてしまったり、レンコンの肌を傷つけてしまう。これを農薬で駆除するわけにもいかない。なんと「救世主現る」ということで、パクパクと食べていただいているところ。

ということで、今度は十分に餌を確保しないといけないということになりました(図-5)。では、なぜなのか。コウノトリが来たのが5月でしたが、夏になるとレンコンの葉っぱが田一面に。レンコンは丈が2m。レンコンの水田は全てレンコンの葉っぱで覆われてしまう。こうなるとコウノトリとしては、餌場として活用がしばらくであろうということで、休耕田を

活用して餌場に活用しようではないか。休耕田をビオトープ化するということで、募集しましたところ、15カ所の田んぼが集まり、面積にして、3haとなりました。魚道も設置いたしまして、水路、田んぼあるいは休耕田にどんどん生物が入り込む環境を作らせていただいたところです。

そして、マナーをしっかりと。「啓発部会」の皆さん方にも「コウノトリ安全パトロール」のステッカーを車に貼り、監視活動をしていただいております(図-6)。そして、監視員の皆さん方は、立て看板を立てると共に、周りの皆さん方に「マナー」を注意して回るという形でしっかりと、そして「遠くから観察をしてくださいね」と、こうした対応をさせていただいております。



図-4



図-6



図-5



図-7

次に「営巣部会」であります(図-7)。当面、この電柱を活用しているわけではありますが、実は徳島は台風の常襲地帯であります。コウノトリが営巣し、皆が見守る中、7月に大きな台風がやって参りました。皆さんは大変心配しておりました。これで巣が飛ばされてしまったら、もう2度と帰って来てくれないのではないかと。しかし、そこは大破とまではいかないまでも、持ちこたえまして、2羽で繕い直していただいたところ。こうした様子もご覧頂けたらと思います。仲睦まじいですね。ということで、できれば永久的にこの巣が保てるように、「人工巣塔」の設置を視野に入れ、設置場所や或いはその構造・素材、先進的な全国の事例、豊岡市さんの映像にもありましたように、こうしたものをしっかりと研究をして参りたいと考えております。

そして、今度は「ブランド推進部会」であります(図-8)。やはり、この幸せを運ぶコウノトリと共に、「コウノトリが生息する場所」、そして作られたレンコン或いは農産物といったものは、減農薬など、「環境にやさしい農業」のまさに象徴といえるところでもあります。これをしっかりと、技術面では「農林水産総合技術支援センター」が、また、こうした活動についてのPRは、地元鳴門市、また学術関係の皆さん、そしてもうかる農業をしっかりと考えるJAの皆様方がサポート。そして何よりも生産者グル

ープ(レンコン研究会)の皆様方も加わり、こうした多くの皆様方の力を合わせて「新たな食品ビジネス」、そして「6次産業化人材の育成」を図っていこう。県内の大学はもとより、高校などにもしっかりと呼びかけて、具体的な推進を図っているところであります。

そうした中、やはり「幸せを運ぶコウノトリ」であります。主力の品種である「備中」は、夏は8月下旬から9月上旬が収穫期であり、7月から8月上旬の台風で大きな被害を受けてしまいます。そこで、レンコン農家の皆さん方の長年の願い、「新しい品種」をしっかりと、できれば早生栽培のできるものと、このように言われておりましたところ、この度、本県の農林水産総合技術支援センターと農家の皆様方との長年の努力が実りまして、「徳島で採れる」という意の「阿波」、「備中」よりも「より白く、優れた味」という意の「白秀」という新品種・「阿波白秀」の開発に成功し、農林水産省に登録申請をしたところであります。

まさに、コウノトリが「新品種のレンコン」を運んでくれたこととなります。また、さらには、6次産業化を日本全体で、産業の成長戦略へと、そして、2020年には1兆円産業へと、国におかれましては、平成26年度に閣議決定を行ったところであります。その意味で、徳島におきましては、今日の名だたる大学の中に「6次産業学部がない」、そして、多くの大学が文部科学省に申請したところ、「全部思いつきではないか」ということで、全部なで切られたところではありますが、これも長年にかけて6次産業化を進め、そして、そのキャリアパスを作ってきた徳島県と徳島大学との共同作業で、いよいよ来年4月、生物資源産業学部が誕生します。徳島大学に新しい学部ができるのは30年ぶり。これもコウノトリのお陰でございます。

そこで、コウノトリをより地域の皆さん方と共に、育んでいこうということで、「鳴門コウノトリ鳥獣保護区」を指定させていただきました。コウノトリが営



図-8

巢しておりました場所を黄色で示しておりますが、この周辺は実は猟銃で撃つことができるエリアでした。この周辺のブルーに染めているところは、銃器の使用禁止区域となっています。そこで、ここを一気にということで「希少鳥獣生息地の保護区」として、県内初の試みとなりました。「猟期の前」ということで、11月1日に490haを指定しました。これによって、周辺の規制区域とともに、大きな規制区域ができることとなりました。コウノトリの行動範囲がより広くなっても大丈夫ということであります。

ということで、いよいよ最後のページとなりました。今、国・地方を挙げて、「地方創生」、それぞれの地域の宝の発見とそれに磨きをかけまして、「大競争時代」となっているところであります(図-9)。そうした「地方創生元年」に、コウノトリがやってきて、しかも営巣を初めてしていただいている、それがレンコン畑。レンコンについては、長らく減農薬など、「環境にやさしい農業」に取り組んでこられた農家の皆さん方のその努力を、コウノトリが国内外に発信してくれたところであります。

この「コウノトリが運んでくれた幸せ」を、全国の皆さん、そして、先程ミラノ万博の話がありましたが、徳島の阿波藍、ジャパンプルーと言われるのは徳島だけ、ということで、9月の6～9日まで日本館の徳島ウィークでは、「ジャパンプルー」をテーマとして、世界に向けて発信させていただいたところであります。

「知恵は地方にあり。」よく地方創生で言われる言葉であります。その発祥も平成22年に行った「徳島発の政策提言」から。是非、徳島としては、「コウノトリ」と共に「地方創生の旗手・徳島」というだけでなく、「日本創成」の礎を皆さん方とともに、しっかりと創り上げて参りたいと思いますので、これからも御協力をよろしくお願い申し上げ、私の講演を閉じさせていただきます。



図-9



コウノトリが飛来し、ホンモロコが育む 渡良瀬の未来

栃木県小山市 市長
大久保寿夫氏

皆様、こんにちは。私は、栃木県小山市長の
大久保寿夫です。

本日は、このような貴重な機会を与えていただき
ましてまことにありがとうございます。今日は鳥の
話が多いのですが、私はその「トリ」を努めさせてい
ただきます。どうぞよろしくお願いいたします。これ
より「コウノトリが飛来し、ホンモロコが育む 渡良
瀬の未来」と題しまして、報告をさせていただきます。

まず、小山市が世界に誇る3つの宝を紹介させ
ていただきます。ひとつ目の宝は、2012年ロンドン
オリンピックで銅メダルを獲得し、2013年開催の
世界水泳で2個の銀メダルを獲得したマルチスイ
マー萩野公介選手。また、ロンドンオリンピックで
銅メダルを獲得し、世界柔道で3連覇を達成した
海老沼匡選手はともに小山出身でございます。そ
して、今年の日本シリーズで、福岡ソフトバンクホ
ークスを日本一に導いたキャッチャーの高谷裕亮
君も小山出身でございます。世界で活躍している
若者たちが宝となっております。2つ目の宝は、渡
良瀬遊水地をはじめとする自然です。2012年7月
3日にラムサール条約湿地に登録され、絶滅危惧
種を含む多くの動植物が生息・生育する自然の
宝庫となっています。3つ目の宝は、本場結城紬で
す。本日は皆様にお披露目するために、着てまい
りました。結城紬は、結城が本場とされている
方もいらっしゃいますが、実はその6割が小山市産

出でございます。全過程を手作業で行う、日本最
古で世界唯一の絹織物の技法が認められ、2010
年11月16日にユネスコ無形文化遺産に登録され
ました。本場結城紬をはじめとする歴史と文化が
世界の宝でございます。

次に、小山市の概要を紹介させていただきます。
当市は、2012年世界のラムサール条約湿地に登
録された渡良瀬遊水地をはじめとする豊かな「自
然」と、2010年世界のユネスコ無形文化遺産に登
録された本場結城紬をはじめとする古い「文化と
歴史」があります(図-1)。とくに、徳川三百年を決
定づけたと言われる、天下分け目の軍議、「小山
評定」の開かれた「開運のまち」であります。

本日は、7市1県からお集まりいただいております。関
東地方は小山市だけですが、東京圏から60



図-1

km、新幹線でわずか42分、鉄道・国道ともに交差する交通の要衝地です。さらに来年、圏央道が開通しますと、そこから15分という優れた立地利便性から、現在も人口が増加し続けております。約16万6千人の栃木県第2の南都です。

そして、本日の地方創生のテーマといたしまして、渡良瀬遊水地の活用ということでございます。それでは、2つ目の宝である渡良瀬遊水地の概要についてご説明いたします。小山市南西端に位置する渡良瀬遊水地は、面積が約3,300haであり、栃木県小山市・栃木市・野木町、群馬県板倉町、埼玉県加須市、茨城県古河市の4県4市2町にまたがる、わが国最大の遊水地です。渡良瀬川・思川・巴波川の3河川が流れ込み、洪水を一時的にため込み、東京を守っている調節池で、利根川治水の要です。1922年の完成以来、90年以上が経過し、自然の宝庫となっています。右下の写真は、本年9月9日に発生した「平成27年9月関東・東北豪雨」による出水の状況で、上空から撮影されたものです。今回の出水での総貯留量は、約8,600万 m^3 、東京ドーム約70杯分にもなります。

我が小山市も、9月の「平成27年9月関東・東北豪雨」で、大変大きな水害を受けました。降り始めからの流域平均降雨量が450.3mmと、これまでの最多雨量を記録しました。しかし、この渡良瀬遊水地がその機能を遺憾なく発揮しまして、約3,000万 m^3 の水を貯めてくれました。

第2調節池の越流堤から、思川の洪水流の流入が始まり、緊急的な対応として、第2排水門を開けて思川の洪水流を取り込み、思川の水位上昇を抑えることができました。結果として、乙女水位観測所の水位は、計画高水位を1.21m超える9.95mと観測以来過去最高を記録し、堤防天端付近まで迫ったものの、その後水位は低下し、惨事を免れることができました。思川が決壊しなかったというのは、まさにこの渡良瀬遊水地のおかげではないか、奇跡ではないかと考えているところであります。

ます。

自然の宝庫である渡良瀬遊水地には絶滅危惧種183種を含む約3,000種の生き物たちが生息・生育しています。スライドは植物の絶滅危惧種であるトネハナヤスリ、タチスミレ、アゼオトギリ、鳥類の絶滅危惧種であるチュウヒとハヤブサです。また、夏の終わりの渡良瀬遊水地には、子育てを終えて南の島へ帰る前のツバメ、約10万羽が集まり、日没とともに一斉にヨシ原にねぐら入りする様子を観察することができます。そして、初冬になると、タカ科の一種であるチュウヒが越冬のためロシアからやってきます。まさに自然の宝庫となっております。

このように自然豊かな渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地に登録されるまでの経緯についてご説明いたします(図-2)。皆様と協力して湿地登録に努力してまいりました。今から7年前の2008年5月18日に開催されましたシンポジウム、「みんなで考えよう 渡良瀬遊水地の賢明な利用」において、私がいち早く渡良瀬遊水地のラムサール条約湿地登録への賛意を表明し、2010年9月28日に、当市市議会が「渡良瀬遊水地のラムサール条約湿地登録に関する陳情書」を採択いたしました。

その後、農家の皆さん、自然保護団体などと、い



図-2

ろいろな話し合いがありましたが、その翌々年の2012年2月28日に、治水推進団体と自然保護3団体が治水機能の向上と湿地の保全・再生に関する相互協力の誓約書を締結し、同年3月26日に、関係4県4市2町の首長が鳥獣保護区の国指定に係る公聴会で賛意の意見を陳述、同年5月22日に日本国がラムサール条約事務局へ登録働きかけに関する「ラムサール条約湿地情報票」を提出されました。そして、同年7月3日にルーマニアのブカレストで開催されたラムサールCOP11において、渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地に登録されました。

ラムサール条約湿地に登録されましたので、湿地の保全はもちろんのこと、賢明な活用も行うことになりました(図-3)。当市では、渡良瀬遊水地を核とした地域振興・経済の活性化を図る「地方創生」の目玉として、ラムサール条約湿地登録渡良瀬遊水地の「賢明な活用の3本柱」を推進しています。まず第1に、治水機能確保を最優先とした「エコミュージアム化」、第2に、「コウノトリ・トキの野生復帰」、そして第3に、「環境にやさしい農業を中心とした地場産業の推進」に努めております。渡良瀬遊水地を活用しまして、地方創生の要にしていこうということで、賢明な活用の取り組みを始めたところでございます。

はじめに、第1の柱、治水機能確保を最優先とした「エコミュージアム化」についてです。これは、小山市の生井桜づつみから見た渡良瀬遊水地第2調節池で、富士山を望むことができる関東の富士見百景となっています(図-4)。富士山はこの堤防からちょうど130km南方の位置にあります。秋から冬の空気の澄んだときには、世界文化遺産の富士山がとくにくっきりとよく見えます。一帯がヨシ原となっておりませんが、かつて昭和30年代までは、大小の池沼が点在し、水生植物や湿性植物などの群落も多く見られました。この渡良瀬遊水地の調節池も現在90年経ちまして、河川水位の低下に伴う地下水位の低下によって、乾燥化が進み、その結果、遊水地特有の貴重な在来の植生が失われ、さらにセイタカアワダチソウなどの侵略的な外来種が拡大するなど影響が生じていました。

そのような湿地環境の変化を踏まえ、より豊かな自然があった頃の原風景の再現を目標として、渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会が1999年に策定したのが、左側の図の「エコミュージアムプラン」です(図-5)。真ん中の図は、国土交通省利根川上流河川事務所が2010年3月に策定した「渡良瀬遊水地湿地保全・再生基本計画」で、治水機能の向上と、湿地の保全・再生を図るものです。そして、右側の図は、これらの計画

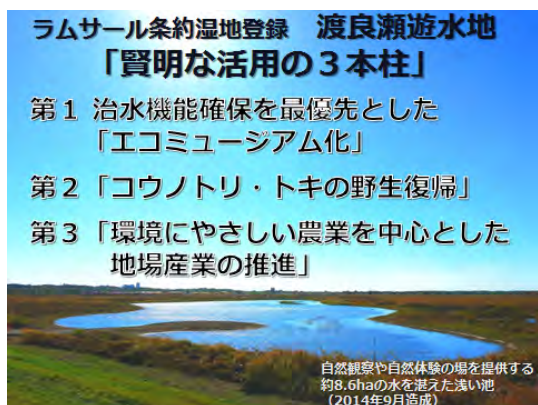


図-3



図-4

を具現化するため、当市が、2015年3月に策定した「渡良瀬遊水地第2調節池エコミュージアム基本計画」です。

当市の渡良瀬遊水地第2調節池エコミュージアム基本計画では、その目標とする姿を『豊かな自然があった頃の原風景の再現!みんなで「創る」、「活用する」、「育て・支える」、自然観察・自然体験の拠点』としています(図-6)。渡良瀬遊水地は昔20%程度が湿地だったわけです。乾燥化が進んだこの遊水地を国土交通省が渡良瀬遊水地第2調節池の掘削により「浅い池」、「深い池」を造成していくことになりました。これが約8.6haの浅い池でございます。今後、面積の20%程度まで湿地を再生していこうということになっています。ま

た、それらをつなぐ「水路」等を活用し、そこに園路や木道等を整備し、東京圏の小中学生や、親子連れ、ハイカーなどに自然観察や自然体験の場を提供して東京から近いという立地を生かして、第2の尾瀬を目指していこうということで頑張っているところです。

続きまして、賢明な活用の第2の柱、「コウノトリ・トキの野生復帰」についてです。小山市では、自然放鳥されたコウノトリやトキが、第2調節池及び周辺地域に飛来し、生息できるよう様々な取り組みを行っております(図-7)。左の写真は、昨年10月18日、7羽のコウノトリが飛んできてくれました。27年ぶりに渡良瀬遊水地で確認されたもので、コウノトリの野生復帰に取り組んでいる兵庫県豊岡市から飛来したものです。右の写真は、本年4月25日に渡良瀬遊水地に隣接する小山市生井地区に1羽のコウノトリが飛来したもので、水田に舞い降り立ったのが確認されました。当市におけるコウノトリ・トキの野生復帰の実現も近いとの思い、期待を一層強ういたしました。

「コウノトリ・トキの野生復帰」に向けた取り組みのひとつ目として、「関東初のトキ分散飼育を実施する自治体に向けての調査・研究」を昨年度から行っています。国の「トキ野生復帰ロードマップ」に合わせ、トキの分散飼育を目指しており、トキ分散



図-5

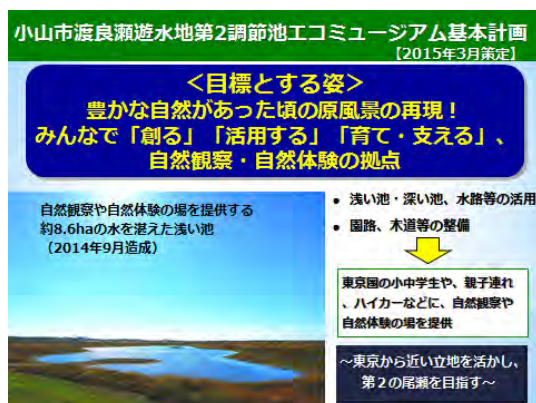


図-6



図-7

飼育可能性の研究としまして、先行自治体である新潟県長岡市、島根県出雲市の取り組みや、分散飼育に必要な条件等の勉強会を実施しています。

また、トキの生息適地に関する調査としまして、渡良瀬遊水地内で2カ所、市内を流れる思川の流域で3カ所、合わせて5ヶ所において、採餌環境及び営巣環境調査を実施しています。図の赤色の丸が調査を実施した地点になります。

2つ目の「エサ場の確保」の取り組みとしまして、当市では「ふゆみずたんぼ・なつみずたんぼ等の拡大」を行っています(図-8)。無農薬・無化学肥料栽培により、冬に田んぼに水を張る「ふゆみずたんぼ」は、今年で取り組み始めてから4年目を迎え、面積が7haに拡大しました。「なつみずたんぼ」は、今年から取り組みを始めました。53戸の農家が42haの田んぼで、麦を刈った後、夏に水を張っています。減農薬・減化学肥料による特別栽培米の「生井っ子」は、今年度25戸の農家が40haの田んぼで栽培しています。江(深み)は、ふゆみずたんぼの中干し期の水生生物の避難場所となり、水田魚道は、ふゆみずたんぼに設置することで、水路にいるタモロコやドジョウなどの魚が田んぼと行き来できるようになります。これらの多様な生き物を育む田んぼの環境整備ということで、餌場の確

保などを図っているところです。この餌場の確保には農家の方々が全面的に協力してくださっており、大変嬉しく思っております。

3つ目の「営巣の場づくり」に向けての取り組みですが、餌場環境とともに、コウノトリが飛来した際に、安心して巣づくりを行える場所が必要となります。そのため、2基のコウノトリ人工巣塔を渡良瀬遊水地に近く、ふゆみずたんぼ・なつみずたんぼに隣接する農道沿いに設置いたしました(図-9)。子どもたちをはじめ、地元の方に温かく見守ってもらえるよう、1基目は幼稚園の近くに、2基目は小学校の近くとしました。この人工巣塔がコウノトリの野生復帰に向けたシンボルとなり、市民の方が自然環境などに、より一層の関心を持っていただけるきっかけになればと考えております。

続きまして、賢明な活用の第3の柱、「環境にやさしい農業を中心とした地場産業の推進」に向けた取り組みとしまして、無農薬・無化学肥料の「ラムサールふゆみずたんぼ米」の生産拡大、減農薬・減化学肥料の「生井っ子」の生産拡大、「ラムサールふゆみずたんぼ米」を活用した日本酒の生産、農家の経営所得の安定・向上を図るための川魚「ホンモロコ」養殖の拡大、市内小中学校へのヨシズ設置やヨシ紙・ヨシ堆肥などヨシ産業の振興に努めております(図-10)。

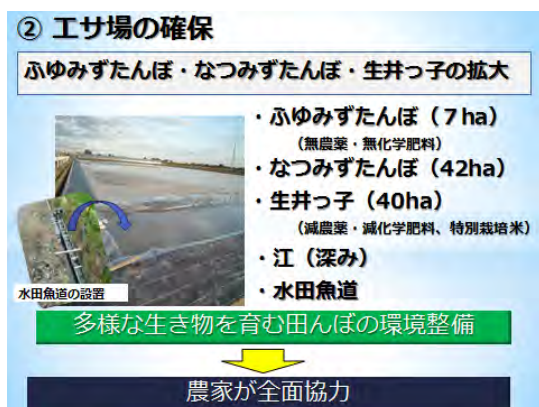


図-8



図-9

ひとつ目の取り組みは、無農薬・無化学肥料の「ラムサールふゆみずたんぼ米」の生産拡大です。農薬や化学肥料に頼らない、安全・安心な、生き物を育む農業を推進しています。ラムサールの名前をお借りしているラムサールふゆみずたんぼ米は、冬に田んぼに水を張ることによって、そこに生息する生きものの働きにより、雑草の生育を抑制したり、肥料成分をつくり出して出来上がるお米で、多くの生きものを育てています。昨年度は8戸の農家が、面積4haで実施しましたが、今年度は11戸の農家が、面積を7haに拡大し、実施していただいております。おいしく、安全・安心なことから、慣行栽培のコシヒカリより高く販売することができています(図-11)。

第3 環境にやさしい農業を中心とした地場産業の推進

- ① 無農薬・無化学肥料の「ラムサールふゆみずたんぼ米」の生産拡大
- ② 減農薬・減化学肥料(特別栽培米)の「生井っ子」の生産拡大
- ③ 「ラムサールふゆみずたんぼ米」を活用した、無農薬・無化学肥料のコシヒカリの日本酒の生産
- ④ 農家の経営所得の安定・向上を図るための川魚「ホンモロコ」養殖の拡大
- ⑤ 市内小中学校へのヨシシ設置やヨシ紙・ヨシ堆肥などヨシ産業の振興
- ⑥ 国内最大の約1,500haのヨシを活用してのバイオマス発電

図-10



図-11

2つ目の取り組みは、減農薬・減化学肥料の「生井っ子」の生産拡大です。当市の地域に生井というところがあり、そこからとった「生井っ子」は、減農薬・減化学肥料の特別栽培米です。2004年から減農薬・減化学肥料の取り組みが始まり、2006年に15名、面積15haで「生井っ子」プロジェクトが設立されました。栽培講習会の実施等により、栽培技術の向上が図られ、消費者の認知度と評価が高まり、高単価で販売することができており、今では25戸の農家により面積40haまで拡大しています。

3つ目の取り組みは、ラムサール「ふゆみずたんぼ米」を活用した日本酒の生産です(図-12)。当市には、5つの蔵元があります。そのひとつの酒蔵である杉田酒造さんのご協力を得て、ラムサール「ふゆみずたんぼ米」のお酒を造っていただいております。一昨年度の生産本数は3,500本、昨年度は4,900本となっています。一昨年度に銀ラベルの本醸造酒、昨年度に金ラベルの純米吟醸酒、そして今年度はプラチナラベルの大吟醸酒を造っているところです。徐々に品質も上がり、生産量も増えているところです。

4つ目の取り組みは、農家の経営所得の安定・向上を図るための川魚「ホンモロコ」養殖の拡大です。ホンモロコとは、琵琶湖特産のコイ科の魚



図-12

で、成魚は15cm程になり、高級食材として料亭向けなどにも出荷されているものです。ホンモロコの実験養殖の取り組みを始めた2013年度は、養殖池面積5aでしたが、昨年度は20a、そして、今年度は25aへと拡大し、実施していただいております。学校給食や個人等にも大変好評をいただいています。頭の前からしっぽまで全部食べられるということで、特に子どもさん、高齢者に人気です。

5つ目の取り組みは、市内小中学校へのヨシズ設置やヨシ紙・ヨシ堆肥などヨシ産業の振興です。渡良瀬遊水地に自生するヨシを活用して、「ヨシ産業の振興」を図るものです(図-13)。当市では、市内全小・中学校38校へのエアコン設置とあわせて、各教室外に節電対策の切り札として、「温度を2度下げる」効果のあるヨシズを、2013年度から設置しています。これまでに設置したヨシズは1,000枚を超え、今後は節電効果のあるヨシズを隣接市町から全国へと広めてまいります。また、ヨシ紙に加工して、小中学校を卒業する児童・生徒に、ヨシ紙で作られた卒業証書をお渡ししました。渡良瀬遊水地には、国内最大の約1,500haのヨシ原があり、ヨシの更なる有効活用を図るため、ヨシを活用したバイオマス発電の実現に向けて、先進地の調査や大学等と連携した研究を進めてまいります。



図-13

当市では、人口の現状と将来の展望を示す人口ビジョンを策定し、これを踏まえて、今後5ヶ年の基本目標や施策の基本的方向、具体的な施策等をまとめた「小山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を本年10月に策定いたしました(図-14)。総合戦略の基本目標として、「産業の振興による新たな雇用の創出」、「新しい人の流れの創出」、「結婚・出産・子育ての希望の実現」、「持続可能な地域づくり」を掲げています。2つ目の基本目標である「新しい人の流れの創出」の主な取り組みとして、「渡良瀬遊水地の観光地化」を推進してまいります。「渡良瀬遊水地」を「地方創生の柱」として、多くの人を受け入れる交流施設として、直売所、加工所、農村食堂、宿泊研修、温泉施設等を整備し、インバウンド対応の観光地化による交流人口の増大を図ってまいります。

これまでにご説明しました「賢明な活用」の3本柱を実現するため、2014年3月に「渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画」を策定いたしました。2014年度から2018年度まで5ヶ年の年次計画により、第1、第2、第3の賢明な活用のほかに、観光客の導入、おもてなし体制、受け入れ施設ということで、周辺市町との連携、受け入れ体制の整備等、様々な事業を展開してまいります。

渡良瀬遊水地の観光地化のイメージを具体的

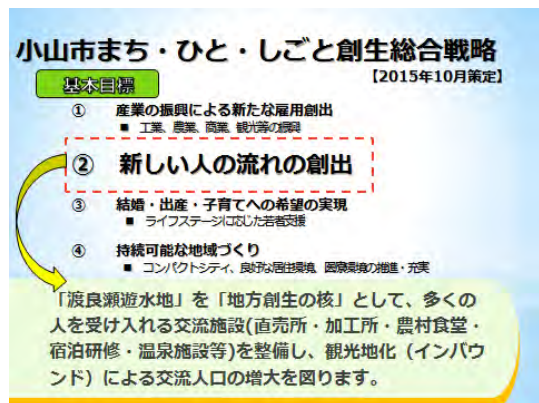


図-14

に表したものです。東京圏から訪れた親子連れなどが自然を満喫、満足していただくため、2泊3日での様々な体験ができるよう考えたものです(図-15)。1日目は、渡良瀬遊水地の貴重な動植物の自然観察やボートを使った水辺での体験。2日目は、都会では体験できない田植えや稲刈りなどを昔ながらのやり方での農業体験。3日目は、雄大な渡良瀬遊水地でのサイクリングなどの遊び。そして、安全・安心なラムサールふゆみずたんぼ米や名物のナマズ料理など地元の食を満喫していただき、温泉で疲れを癒してもらう。2泊3日で、東京圏の親子連れやハイカーを渡良瀬遊水地に呼び込もうということで計画をしているところでございます。

私が思い描く渡良瀬遊水地の未来につきましては、冒頭でもお話しましたが、渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会が策定した「エコミュージアムプラン」にあるように、より豊かな自然があった頃の渡良瀬の原風景である湿地環境を再現することです(図-16)。そのために、かつて見られた良好な水辺環境や貴重な動植物が生息・生育する魅力的な湿地環境を取り戻す取り組みを進めてまいります。そして、ワイズ・ユースの観点のもと、渡良瀬遊水地が自然観察や自然体験の拠点となり、東京圏の小中学生や親子連れ、ハイ

カー等、数多くの人を呼び込んで、地方創生の目玉にしようということでもあります。

渡良瀬遊水地及び周辺地域は、水とみどりに恵まれた良好な自然環境が形成されたエコロジカル・ネットワークの核となっています。おかげをもちまして、2015年11月17日、渡良瀬遊水地周辺にコウノトリを呼び込もうということで、小山市だけでなく、関係4県、6市、4町により、豊かな生態系の指標として、水辺生態系の高次消費者であるコウノトリが生息する環境を目指す「渡良瀬遊水地エリア エコロジカル・ネットワーク推進協議会」が、設立されました。協議会は、有識者、国・県の関係行政機関、周辺10市町の首長により構成されており、今後、多様な主体が協働・連携して、自然環境の保全・再生を推進し、賑わいのある地域振興・経済活性化方策に取り組んでまいります。

国土交通省の利根川上流河川事務所が音頭を取ってくださいます、小山市の計画を全渡良瀬遊水地で実現していこうではないではないかということになり、私達も大変嬉しく思っているところでございます。このように地方創生の要として、渡良瀬遊水地を活用してまいりたい、これが小山市の計画でございます。今後とも皆様どうぞ引き続き、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。ありがとうございました。



図-15



図-16

総括

東京都市大学 教授 涌井史郎氏

ただ今ご紹介いただきました涌井でございます。今日は大変感動いたしました。と申しますのも、私は、我が国の未来に対して、どちらかと言うと悲観的な見方をしていました。

しかし、韓国・順天から大変勇気の生まれるお話を趙忠勳市長から頂き、それを契機に、国内8自治体の市長と知事からも自然共生への明確な戦略と、それに対する具体的な事例を披瀝いただいたからです。これに大変感動を覚えた訳です。そうしたお話の中に、エコロジカル・ネットワークという話がかかなり出てまいりました。また、同時に各地が立ち上がって、生きものと人とをつないでいこうという動きについてご紹介いただきました。

エコロジカル・ネットワークの考え方をこの機会に少し整理させていただきます。2007年に第三次生物多様性国家戦略策定され、ここで初めてエコロジカル・ネットワークという考え方が全面的に取り上げられたと記憶しております。つまり人と自然の共生を確保していくために、原生的な自然地域等の重要地域を核として、生態的なまとまりを考慮したうえで、有機的につないだ生態系のネットワークを形成することにより人と自然の共生を模索しようとするものです。

こうした考え方にに基づき、2008年、環境省と国土交通省の共同作業で、国土形成計画立案と不可分な国土のマネジメントにかかわる大きな要素として「全国エコロジカル・ネットワーク構想」が

検討されることになりました。ちなみにその座長はかく言う私でした。

その考え方をざっくりとご紹介しますと、生態系の保全・再生・創出は国全体で進めるべきではあるが、それを一挙に実現するのは難しい。そこで、生態系ピラミッドに着目をし、一定の空間を支配する動物の代表的指標種のハビタットに着目をし、その維持の方策を検討し、併せて重要なホットスポット、拠点が適切に配置される可能性とそのつながりを描き出していこうというものです。

この考え方を、ある種のモデルとし、全国のみならず、それぞれの地域を対象にした、エコロジカル・ネットワークの地域版を作ってほしいということも呼びかけたわけです。

こうして生物多様性に関わる国策を固めながら、2010年のCOP10を迎えました。COP10では、2011年以降の新たな世界目標である「生物多様性戦略計画2011～2020及び愛知目標」が採択され、2050年までの長期目標として「自然と共生する世界」の実現、2020年までの短期目標として「生物多様性の損失を止めるために効果的かつ緊急な行動を実施すること」が定められました。

これらの議定に基づき、COP10の成果を確実にするため生物多様性の主流化を図る有効な方策として、翌2011年に、多くのステークホルダーの参加を得て経団連会長が委員長、私が委員長代理となり「国連生物多様性の10年日本委員会」が

設立されました。

その後不幸なことに、2011年3月11日に東日本に地震・津波での惨劇が起きてしまいました。そこで、2013年に、早くも日本生態系協会がこの悲劇を念頭に置いて、グレイインフラからグリーンインフラへという問題提起を前提とした国際会議を主宰されました。すでに欧米では、自然を資本財として捉え、激化する自然災害に対して、それを有効に活用しようとする動きや政策が具体化していたからです。実にタイムリーでした。

こうした成果が、2015年3月に仙台で開催された国連防災世界会議に反映されていきました。それまでのエコロジカル・ネットワークの議論は、生物多様性の保護に貢献する、あるいは自然地の回復といった観点に偏ったものでした。それを脱してようやく人と自然の共生という考え方が、具体性を以て語られ、我が国の防災、減災の対応策としても、このエコロジカル・ネットワークを大いに活用すべきだという議論に昇華していったわけです。

その2011年からもうすでに4年半経っています。今お示ししているスライドに「私たちは、悔しいんです」という文字が書かれています。被災地のひとつである陸前高田の方々が、このポスターを作られたわけですが、何が悔しいのか。人命や親せき縁者、自分たちの家財がなくなったこと、それも悔しいことのひとつです。しかし、それだけではなく、先祖や様々な言い伝えで、土地や自然とはこういう接し方をしろという教えがあったのに、自分たちがしっかりとそれを履行してこなかった。その結果が被害を拡大した。だから悔しい。こういう意味があるということでもあります。そこで、人々は津波が押し寄せた到達点を桜の木でつなぐ桜ライン311を立ち上げました。4月の中旬、桜の花が一斉に開くことによってできるラインで、津波がここまで来たということを後世に伝えていこう、そして、何よりも自分たちの土地の自然の特性をよく理解しようという動

きであります。

東北の方々には、いわゆる防災・減災に加えて、災害を克服するという意味での「克災」という、表現に相応しい精神が根付いています。この克災という言葉は私の造語ではありますが、まさにそうした方向で大きな努力をされ、土地に生きる歴史を積み上げてこられました。そうした精神が、この悲劇にも関わらず陸前高田の人々をして立ち上がらせているわけです。

ここに世界の大都市の災害頻度を整理したスライドがあります。オリンピックではありませんが、もし災害に5種競技があるとすれば、残念なことにこのグラフのとおり、金メダルは東京、銀メダルは大阪ということになります。これほどまでに災害と密接な関わりのある国土であり都市であるのが我が国という認識を深めねばなりません。

さて、このスライドに危険な自然事象、暴露、脆弱性という3つの言葉が書かれています。危険な自然事象というのは、それぞれの災害であります。暴露というのは、もしそこに人が住んでいなかったり財物がなければ、それは災害リスクにはならないが、そこに人が住んで財物があればこそ災害リスクになるという意味で、そこにどのように人命や財産があるのかということが暴露という意味です。脆弱性とは、そのリスクに対する耐性で、それがどの程度かということをはきちんと評価する。そうすれば、この3者の関係の中で、災害リスクの程度がおのずと決まるというのが、国連防災会議の結論です。

この災害耐性つまり脆弱性の程度は、自然の力をいかに借りるのかと無縁ではありません。寧ろそうした方向こそが大切とする考え方が世界中の認識になりつつあります。いわゆる緩和から適応策を重視する考え方への変化です。そうした方向こそがグリーンインフラという考え方です。単に生きものが豊かに暮らすということだけではなく、エコDRR、つまり災害に対して生態系の機能を活用する方策を重視する考え方が日々強まっています。

例えば、今年度策定された国土強靱化基本法。そして国土強靱化基本計画を受けての国土形成計画には明確にグリーンインフラという記述がなされています。また社会資本重点整備計画にも盛り込まれています。ようやく日本にも、自然を災害と結び付けながら議論していくという方向が出てきたというのが私の実感です。

ご承知のとおり、今、地球が危ないことは言うまでもありません。CO₂濃度の伸びと世界の平均気温の上昇、合わせて生物多様性の絶滅の指数というもの。この3つが共通したカーブになっています。地球は半径6400kmという非常に大きな星ですが、生命圏がどれくらいあるのかというと、水圏で10km、陸圏で20km、合わせて30kmでしかない。つまり、直径20cmの地球を描いたら、生命圏はわずかに0.5mmであります。その地球の生命圏の中にコウノトリやトキが飛び、生きものがにぎわう空間がどれだけあるかと言うとたかだか5kmです。これを水平距離に考えたとき、我々はどれほど危うい生命圏の中で暮らしているのかが分ります。このスライドに、世界人口の推移の急増する曲線が描かれていますが、産業革命後、地下資源を地上のエネルギーに転換することにより、単位面積当たりの収量を増大させ、地球人口を賄ってきました。がその結果、前述の共通する3つのカーブを生み出し地球を危機に陥らせています。その原因は、までもなく我々人間社会にあり、我々人間の欲望の増加が、災害を多発させ、地球を危うくしているという事実突き当たるわけであります。人間の欲望は増大しても、地球は一定の規模でしかありません。

我々は、発想を変えなければなりません。ここに知覚心理学でよく知られているルビンの壺の画像を示させていただきます。我々はつい既往の概念にとらわれて、これを壺としか見ない。しかし、よくよく見ていただきますと、両側に向き合った男女の顔があることにお気づきだろうと思います。これを

環境問題に置き換えてみますと、我々は産業革命的な発想で、成長こそが幸せの源泉であり、社会資本財重視、豊かさを追い求める社会、利益結合型社会、中央集権型の国家構造こそ明日を担うのだとの考え方が支配的だと壺に見える。しかし、そのままが良いのか。

我々はすでに限界を見てしまっているわけです。そこで産業革命の次なる革命、すなわち環境革命的な発想で、社会を捉えなおすことが地球の持続的未来を願うならば必然となりましょう。よって我々の生活基盤を、成長から成熟というところに置き換えるということが求められます。伝統や自然を資本財として考えると、豊かさを深める社会をどのように構築するのか。利益結合型ではなく、様々な人とのえにし、地縁結合型社会、あるいは土地との縁を大切に考える社会。あるいは、地域の個性重視型の社会、自立分節型の国家構造。こうした新たな発想に立って、生産を優先するのではなく、ライフスタイルを優先していきながら、持続的な未来を考えていくことが求められましょう。我々は、もうどっぷりと産業革命的な発想に浸っている。そこから如何に発想の転換を図るのか。「坂の上の雲」のように、努力をすれば明日が開けることは真理ですが、それを経済成長として捉える時代は終わったのです。

竜安寺の一角に、「吾唯足知(われただたることをしる)」ということが書かれた古銭型の水鉢があります。我々も限界を知り、豊かさを追い求める社会から、深める社会に転換し、自然と人間とのバランス、そして北と南のバランス、将来の世代が活用する取り分を我々の世代が奪わないというバランス。こういうバランスを少しづつ取りながら、トレンドという発想からバックキャスト、つまり地球の限界から逆進的な発想で、今の我々のライフスタイルを一定でしかない地球の環境容量の範囲に抑制することが求められます。文学者の直感というのはすごいもので、五木寛之さんが「下山の思想」という

本を書かれています。まさにそうした発想に立つべき時代に来ているのではないかと思います。

ところがその一方で、国内的には、いわゆる2030年問題を抱えています。経団連のシンクタンクによると、日本と世界の50カ国の経済予測を考えていくと、2030年以降、世界人口は70億から90億になる。そのとき我が国では少子高齢化が進み、騎馬戦型から肩車型になって高齢者を支えなければいけないという状況になる。また、労働生産人口は大きく縮小し、結果経済はマイナス成長に転じます。経団連の予測の「基本シナリオ」では、中国と米国の約6分の1のGDPになり、国民一人あたりでは韓国に抜かれて世界18位になる。また、「悲観シナリオ」では、日本のGDPは、米国、中国の8分の1に縮小して、かつて経済大国であった極東の1小国となるだろうということです。

当然ながらこうした統計上から予見できる未来に対し、どう対応するのかという議論が盛んです。しかし、相変わらず豊かさを追い求めることを前提とした議論になっています。すなわち最も合理的な解である集中という方策の選択です。

今進められつつある政策は、国土計画レベルでの「スーパーメガリージョン構想」つまりリニア新幹線をツールにして、名古屋を東京の郊外にするような図式で、そこに労働生産人口おおよそ3000万人を集中させ、これを日本の成長のエンジンにする。あるいは、大規模機能集約型都市構想、すなわちコンパクトシティ。これまでの職住分離の考え方を改め、職住一体型の都市にして水平的広がりがある都市を集約させ、さらに生産性を高くしていくといった構想であり政策です。

私はこの2つの議論を否定するわけではありません。しかしながら、その2つの議論が是認されたとして、そうした地域あるいは巨大都市はともあれ、他の地域は一体どうなるのだ、そうした地域をどう国土計画に位置付けるのか、こういう対論がなくては、この議論は非常に偏ってしまうことを危惧してい

ます。

その対案は、3. 11の折に我々が大いに学んだことにヒントがあるのではないのでしょうか。それは、リング型、つまり真ん中に全ての中枢が集まって、それが全体を支配するという構造ではなくて、ブドウのようにそれぞれが個性を持って自立分節をしていくという国土構造です。ただし、そのブドウにはネットワークが必要です。それはエネルギー、情報、アクセスのネットワークです。そして、それにプラスして、エコロジカル・ネットワークがつけ加えられていくということが非常に重要であります。このネットワークが対流を促進していく大きな送電線になる。こう考えるべきだと、私は考えています。こうした構図の中にこそ、グリーンインフラの真価が発揮できるからであり、成熟型の国土を創出する可能性が広がるからです。

我々は、先ほど申し上げた、国連生物多様性の10年日本委員会で、こうした議論を含めながら、生物多様性を主流化するという運動を、経団連や民間の諸団体も含め、環境省と共に対応しております。生物多様性のパートナーシップに参加をしていただいている企業は、すでに509社にも及んでいます。

さて、こういう動きを背景にし、今日この会場で、各地において培ってこられた人と自然の共生の実例のご報告に接し、改めて、生態系サービスを活用した減災型の国土と都市、そして地方の健全性を獲得していく可能性を十分感じさせて頂きました。おそらくは会場に詰め掛けられた多くの方々も同感であったのではないかと思います。

過度な集中が招く結果は、ストロー現象です。人口の流出、地域の地盤沈下、消費の流出、支店や配送拠点の統廃合。こういったことによって、地方の過疎化に拍車をかけることになります。

このままですと、2050年には、現在の人口の半分になるという府県が、何と16府県あるという研究があります。そうした予測からも、我々は、成長エン

ジンに位置付けられた地域からとり残された地域をどのようにマネージメントしていくか、これをしっかり考えていく必要があります。

そのためには、自然を資本財として捉えていく行動力が必要で、今日の各地の皆様方のお話は、まさにそうした行動力そのものだと思います。皆さんそれぞれが、地域の人口減少や増大する自然災害のリスクをしっかりと捉え、それを負の要素ではなく、正の要素、ポジティブな方向で考えていこうとされています。そのうえで何よりも、自らの地域の価値ある自然資本を構成する要素をきちんと知り、評価し、それを地域振興に資する経済としっかり結び付けていこうとするご提案が多々ございました。

果たしてこうした場所に相応しい例えかどうかはわかりませんが、私は、未来は釣りバカ日誌のスーさんと浜ちゃんになぞらえて絵解きすべきだと思います。今まで我々は、スーさん型で生きてきました。幸福というのは欲しいものが買えること。すなわち豊かさを追い求めること。そのためにはモノの生産力の高い巨大都市がいい、利益結合型がいい、スピードこそが重要と、生産という観点における経済を全てに優先した国土や都市、そして生き方を選択してきました。

しかし、これからは浜ちゃん型だと思っています。内閣府の「今後の生活で重視するものは？」という統計を見ると分りますが、モノの豊かさを重視するという方向から、1980年代末から圧倒的に心が豊かな方がいいという方向に変わってまいりました。すなわち、心の豊かさを深めたい、地縁結合型社会、スローライフが幸せ、自己実現優先、というような方向、つまり浜ちゃん型のライフスタイルが、多くの国民の心を捉えているという事実であります。

高名な社会心理学者のアブラハム・マズローが言う人間の欲求の最終段階は、自己実現目標としています。自分らしく生きていくことに対して、人生の時間をどれほど使えるのか。つまり自己実現

分の時間消費の割合が大きいほど幸せという可能性が示唆されていると考えてよいでしょう。地方での生活は収入が大都市に比べて低いものの、豊かな自然とゆとりある時間がある。こうした自己了解が地方で暮らす方々を支えてきました。

しかし、先ほどのスーパーメガリージョンのように、さらに国土上に高速交通と情報のネットワークが強化されていきますと、二重の暮らしの可能性が人々に増えることとなります。今日は浜ちゃん、明日はスーさん。こうした国土に対流現象を起こし得る暮らし方も可能となるのです。

そうした、対流が促進する可能性が増すのであれば、対流を希望する人々は自ずと何処と何処を拠点とするのかについて、選択眼を養うことになりましょう。であるとするならば、東京や大阪のモノマネをするような地方地域は自ずと選択の対象から外れます。したがって、その地域の個性をより際立たせていくことに熱心な地域こそが、選択的対流拠点の対象となる事でしょう。

「愛知目標」、これは日本の愛知という地名のついた目標であります。この愛知目標のために、とりあえずは2020年までの間が、2050年つまり愛知目標の目標達成年までの「国連生物多様性の10年」とされています。

其の2020年は、偶然にも東京でオリンピック開催年となりました。これを偶然ではなく、日本初の新たな環境革命へのワンステップとして位置づけ、そこから未来にさらに持続性を担保するための行動を開始するということとなれば、オリンピックの意義は否が応でもさらに増し、世界の人々に未来をポジティブにする道筋を示すことができましょう。自然共生と再生循環型社会を実現するという方向です。もとよりそうした方向付けにより、人口だけが地域社会の基盤であるという旧来の発想から解き放たれ、新たな地方創生が実現できるのではないのでしょうか。

グリーンインフラというものを中心に地域の経営

を行っていく発想は今更のものではありません。日本の伝統的社会像そのものです。我々は幸いにして里山社会モデルというものを持っております。昔話は、必ずその始まりに「昔々おじいさんは芝刈りに」と書かれています。つまり、日本の自然は人が手を入れていくことによってはじめて望ましい姿が保たれるという教訓を、昔話の冒頭につけ子供たちに伝承してきたという歴史です。最近のおじいさんは、ゴルフ場に芝刈りに行くことが多いのですが、そうではなく改めてしっかり柴を刈ること、すなわち自然に手を入れることに目を向けることが大切です。

これまで130年の近代の歴史が、人口急増社会と産業革命成功国の後を追って、成長、成長と言ってきた。しかし、21世紀の100年は、人口減少社会、さらに言えば自然資本というものが国土、都市の一番大きな基盤になる環境革命を迎えるわけであります。そういう意味で、今日の日韓9県市のお話というのは、そうした未来へのスーパーモデルになるのではないのでしょうか。そう考えますと、国境や地域を越えて、このような情報交換ができたことに、今日の主催者生態系協会に敬意を表したいと思います。

原点に還れば、エコというのは古代ギリシャ語の「オイコス」という意味であります。自分の家とか故郷とか、共同体がオイコスの意味です。そして、「オイコス・ロゴス」、すなわち共同体の真理というものがエコロジーの語源であり、共同体の「ノモス」、秩序というものがいわば、エコノミーの語源であります。すなわち、古代ギリシャ人は、明らかにエコロジーとエコノミーは表裏一体であると考えてきた。しかし、デカルトが、産業革命直後にこれを全くの二律背反の関係にしてしまい、自然と人々は股裂きになってしまいました。

しかし、今日の事例発表によって我々は大いに勇気づけられました。先ほど豊岡の市長がおっしゃった、「経済とエコロジーは矛盾するものではない」

というメッセージからも、再び自然と人々が共生できる明るい未来を見出すことができました。また韓国・順天から学んだ、「都市の中に庭園があるのではなく、庭園の中に都市がある」というシンガポールでも実現している方向にも明るい未来への道筋を見出すことができました。今日のお話やご報告から我々は大きな勇気を得ることができました。行き詰まりつつある現在から、踵を返し、豊かさを深める社会の未来を描きなおすことができそうです。本当にありがとうございました。

(公財)日本生態系協会は、持続可能な社会を目指し、自然と共存する、美しく、心豊かなくにづくり、まちづくりを進めるために活動するシンクタンクです。アメリカおよびヨーロッパ地域事務所を通じて、国内のみならず、世界各国地域の行政や研究機関、NGOなどと交流し、海外の先進事例などを収集・分析し、蓄積しています。そうした情報を基に、自然と伝統文化など、各地の魅力を活かした持続可能な地域づくりの提案、各種法制度に自然との共存という視点を加えるための提言などの活動を展開しています。そのほか、シンポジウムやセミナーなどの開催、ビオトープ管理士・こども環境管理士の認証、ハビタット評価(JHEP)の認証なども行っています。主な著書に、『にほんのいきもの暦』(アノニマススタジオ)、『ビオトープネットワーク—都市・農村・自然の新秩序—』(ぎょうせい)、『学校・園庭ビオトープ 考え方 つくり方 使い方』(講談社)、『環境アセスメントはヘップ(HEP)でいきる』(ぎょうせい)、『美しいくにをつくる新知識—持続可能なまちづくりハンドブック』(ぎょうせい)などがあります。

国際シンポジウム
地方創生に求められるもの
地域と世界を結ぶ
講演録

平成28年1月発行

編集・発行 公益財団法人 日本生態系協会
171-0021 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル
TEL 03-5951-0244 FAX 03-5951-2974
www.ecosys.or.jp